



東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 172 Jan. 1. 2023

発行 公益社団法人
日本山岳会東海支部

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMビル

電話：052-332-8363 FAX：052-322-7924

郵便口座 00800-5-13749 「日本山岳会東海支部」

銀行口座 三菱UFJ銀行 覚王山支店

普通1222073 「日本山岳会東海支部」

編集 星 一男

印刷 (株) 浅井隆文社



アマダブラム峰ファストマウンテニアリング 詳細はP3参照

目次

○年頭のご挨拶	高橋玲司	2	○トピックス	23
○マナスル・アマダブラム			○朝明ミーティング開催報告	金谷正起 24
速攻登山報告	山田利行	3	○同好会コーナー	村中征也 25
○北アルプス全山縦走報告	草野駿希	7	○支部友コーナー	田中 進 26
			○東海支部蔵書からの一冊③④	石田文男 28
○秋のブラインド登山	前田隆久	11	○登山用具あれこれ⑥	千葉泰丈 30
○山岳古道調査活動報告(3)	西山秀夫	12	○山書蒐集夜話 その3	安藤忠夫 31
○コロナ下の森づくり	和田豊司	14	○委員会報告 東海ユース/山行	34
○ゴザフェス2022を振り返って	丸岡春香	16	○会務報告	今津英一郎 36
○東海岳人列伝②	西山秀夫	17	○ルーム日誌・会員異動	今津英一郎 38
○モニタリング1000里地調査	井藤恵美子	21	○INFORMATION	星 一男 39
○道迷い遭難防止講習会	清水克宏	22	○編集後記	

年 頭 の ご 挨拶

支部長 高橋 玲司

新年あけましておめでとうございます。

新年がスタートするのにあたり、新型コロナウイルスも徐々に沈静化し日常生活も取り戻しつつありますが、活動には最大限配慮の上行動をお願いいたします。

昨年はコロナの逆風下でありましたが、60周年事業として特にヒマラヤ登山も2隊が派遣されました。山田利行君率いる2名がクーンブヒマラヤの未登のカンチュンナップ北西壁(6090m)をアルパインスタイルにて初登攀に成功、星一男さん率いる第14次インドヒマラヤ隊がShaldor Ri(シャドール・リ、5942m)初登頂、Dzo Jongo(ドゾ・ジョンゴ、6211m)東峰第2登に成功しました。インド隊は長年継続し続けて、中高年に希望を持てる登山と、若手精鋭のアルパイン登山隊と対比的な二隊でありました。山田君は秋にもマナスル8163m無酸素単独アルパインを目指し、残念ながら荒天で成功しませんでした。転身アマダブラム6856mの単独無酸素登頂に成功、そして往復の登頂スピード記録を樹立する等大きな成果を果たしました。国内では草野駿希君による北アルプス全山の33日間単独無補給縦走が行われ、無事大成功に終わり、その経過がSNSで更新され、多くの人に新鮮な映像が更新されたのは感動を生み、新しいニューリーダーの息を感じた瞬間であります。

この様に、国内外で大きな成果を出した一年でもありました。

今年は、コロナの自粛もなくなっていく事が想定され、支部の活性化再活動元年として、①多様性を持った活動の実践②連携を持った活動の実践を志していただくと幸いです。多様性とは、さまざまな委員会活動をさらに活発化し、新たな取り組みも視野に入れ、活動できると活性化されると思います。個人的には(バリエーションクライミングの取り組み実践、SNSの情報発信、トレラン志向者の集まりの検討)など行っていけたらと思います。②の連携を持った活動では、委員会同士の交流、他支部交流などがあるかと思っています。支部の活性化の為には、委員会に加入されるこ



とが重要であり、楽しくも充実した支部ライフが行えるものと考えています。山岳活動の多様性として、トレランなどの活動が新しい委員会に発展するにつながることを期待します。

また委員会同士の連携した取り組みも増えることも大いに期待しています。他支部との交流も、積極的に行いどんどん日本山岳会のスケールメリットを生かしていただくと良いかと思います。多様な提案を戴ければ、柔軟に対応し受け入れる、そんな支部風土も生かされると良いと思います。

この様に活動も活性化して、充実した支部ライフが送れることを祈願して年頭のあいさつと代えさせていただきます。

最後になりましたが、支部新年会をコロナ対策の準備を十分に行って、1月15日に開催します。是非、多くの支部関係者の皆様とお会い出来る事を楽しみにしています。

マナスル・アマダブラム

ファストマウンテナリング

支部員 山田 利行

頂は遥かなり・マナスル(8163m)敗退

モンスーンの影響でカトマンズ着いてから2週間以上悪天が続いていた。C3(6700m)までの2回目の高所順応を終えた私は、予定のC4までの高度順応ができず悶々とした気持ちでBCの仲間達と天気予報を見ていた。いつモンスーンが明けるのか。

私がジョインしていたのは、K2の冬季初登を昨年果たしたミンマ・ギャルジェが経営するイマジンネパールだった。現在のヒマラヤ登山は、ネパール最大のガイド会社であるセブンサミットトレックをはじめとする8K、エリートエクスペディション、イマジンネパール、パイオニアなど大手のガイド会社によってオーガナイズされている。自分たちのヘリコプターも所有し、ヒマラヤ登山を完全に牛耳っている。ライバル会社でありながら無線で情報交換など連絡を取りながら、協力して登山を行っているため必然と登頂の時期なども同じになってくる。

どうやら25日以降にモンスーンが明けはじめ天候が回復してくるという話になった。酸素を吸って頂上を目指すほとんどの登山者はC2まで高所順応をした後、一度ベースキャンプに戻りすぐにサミットプッシュに出かける。28日を頂上アタックの日に設定したようだ。彼らは25日にサミットプッシュを目指してC1に向かった。

無酸素でしかもワンデイでソロで頂上を狙う私は、彼らとは違う行程で少なくとも3回の高所順応、できれば4回しないとダメだと見積もっていた。実際のアタックに備え3回目の順応からはBCからC3までは一日で登り、行動することにした。

これまでに降り積もった雪が牙をむき出した。26日、サミットに立ったアメリカの著名な女性スキーヤーのヒラリー・ネルソンが頂上直下からスキーダウン中に先行していたパートナーが起こした表層雪崩に巻き込まれて遭難したのだ。

翌日にはBCでのんびりしていると突然ラジ



マナスル・C1へ向かう

オが騒がしくなり出した。C3とC4の間で雪崩が発生し、イマジンネパールのシェルパを含む十数人のシェルパ達が雪崩に巻き込まれたのだ。C3に滞在していたメンバーによると、数名のシェルパが重体、ヘリで収容されるまでテントで介抱したり大変だったと言っていた。結局1名のシェルパが亡くなる痛ましい事故となってしまった。ヒマラヤ登山に遭難は付き物と言ってよい。

翌日彼らは予定通りサミットプッシュに出かけることを決定していた。私もその状況をBCで聞きながら27日夕方6時15分にC4を目標に調子が良ければいけるところまで行こうと決める。あたりが暗くなり始めた頃ベースキャンプを出発した。

2回目の順応の後、体調を崩してしまっていた。他のほとんどのメンバーが、風邪なのか咳をしまくっている環境での共同生活で、自



マナスルC1からC2を望む

分の体調管理の難しさを感じた。数日間完全に休養し、ベースを出た時には調子は悪くなかったが、歩き出して一時間もすると冷たい空気を吸っていたためか猛烈にのどが痛くなってきた。時折発作のような咳も出る。痛くて唾を飲み込むのも辛い。次のチャンスに備えて引き返すべきなのか。歩きながら自問自答を繰り返す。痛みとは裏腹に身体の動きは悪くない。何とかなるそう言い聞かせてC3を目指す。

予定通り標高差1900mを6時間半の好タイムで登りC3に到着した。私の作戦でC3にデポしたダウンスーツに着替え、暖かいお湯を補給する。これが軽い休憩にもなる。1時間弱そこで過ごした後、C4に向け出発した。C3からC4までは斜度30度程の雪の斜面が700mも続く。教科書通りの雪崩斜面である。昨日雪崩ばかりだから今日は大丈夫だと判断する。

数百メートル登ったところで風が猛烈に強くなってきた。予報よりも明らかに強い風だった。目も開けられなくなりゴーグルをつける。更に進むが今度は吹き荒れる風が顔に纏わりつき呼吸が出来なくなってしまった。行こうと思えばまだ進める。だが「ここでこの風だとしたらC4からの頂上稜線を進めるのか？」自分にはまだ時間がある。「体力を節約し、次回に掛けるべきではないのか？」その場に座り込み真っ暗闇の中考えを巡らせる。「次のトライに全力をかけよう」そう決心して下山を開始した。結局この時の標高6850mここが私の最高到達点であった。

数日の休養を得て、10月1日再度C3に入る。

天候は相変わらず不安定で天候が良くても風が強い日が続いていた。すでにワンデイでの登頂は諦めており、C3で停滞してでも頂上を目指す単なる無酸素登頂に目的を変えた。

しかし、2日にC1とC2の間で雪崩が起きシェルパー一人が遭難。更に追い打ちをかけるようにBCにも雪崩が襲い私達のテントも潰されたらしい。それでも諦めきれなかった。まだ本当の頂上すら見ていないのだ。私は翌日まで停滞を決めた。

2日目の寒い夜を小さなテントで明かした。翌日、外は快晴であったが噴煙をあげるマナスルを見上げて私の気持ちは完全に折れてしまった。「もう十分だ一刻も早くこの山から離れたい」。そんな気持ちでテントを撤収し、ベースキャンプへと下山した。

マナスルの敗退からアマダブラムへの転戦

カトマンズに戻り、帰国便を待つ間、ホテルの部屋で悶々とマナスルの敗退を振り返っていた。登頂出来なかったことは重要でなく、自分が全力を尽くす登山が出来なかったことが悔しかった。自分がどこまで高所で動けるのか限界を知りたかった。

多くの方に支援してもらっていることも申し訳なかった。客観的に見て私の判断は間違っていなかったと思う。敗退の一番の理由は天候が悪すぎた。モンスーンが長引き、日本のような湿った雪が毎日数十センチ積もるような状況であった。天候が良くなっても頂上付近の風速はずっと30mを超えている日ばかりで、大雪と風のコンビネーションはウィンドスラブによる表層雪崩の発生条件としては十分だった。事実登山の最終段階では至る所で表層雪崩が起きていた。

このまま遠征を終わらせるか否か。マナスルでの高所順応を活かすことはできないか。ファストマウンテニアリングの条件に合う山として、アマダブラムとプモリの選択肢があった。どちらも公募登山隊が入るためルートの仕事がされていること、標高も私の順応で対応できること、ジョイントパーミットを使って費用を安く抑えられること、エベレスト街道は旧知であることなどだ。

また、マナスルでレコードタイムを出したイタリアのクライマーがアマダブラムでもレ

コードタイムを持っていることも事前知っていた。すぐに高橋支部長に連絡し、私の想いを伝えた。

「広島隊の計画の邪魔にならないようにやれるならいいんじゃないか」と賛同を貰った。これが後押しとなって今回のアマダブラム(6813m)の登山に向かうことを決めたのである。結果、アマダブラムBC往復のレコードタイムを出すことができたのであった。

アマダブラム(6813m)へ向かう

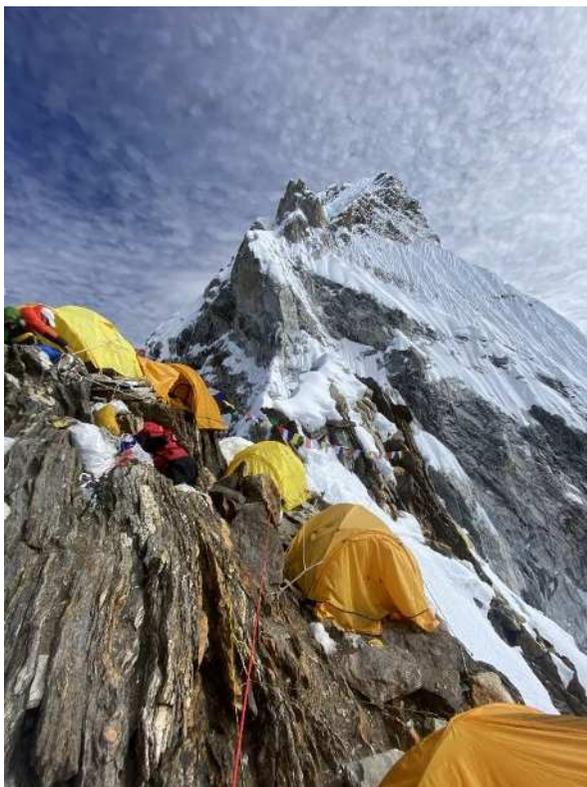
マナスルでの鬱憤を晴らすかのような爽快な朝だった。10月22日、午前9時42分私はアマダブラムの頂上に立った。ルートは、南西稜のノーマルルートである。ベースキャンプを4時きっかりに出発し、他のパーティーをごぼう抜きにして「5時間42分」で標高差2300mを登ったのだ。

軽量化の為、C2から上は水も持たず着のみのままヘッドランプとジェル2つ、カラビナ2枚だけで登り続けた。東海支部旗も一緒だ。ベースキャンプの喧騒とは違い、頂上には私一人だった。東海支部の登ったローツェ南壁、マカルー西壁、カンテガ北壁、タウツェ東壁と360度のパノラマがそこには広がっていた。喜びに浸る間もなく、記録の為に頂上での自撮りを済ませさっさと下山を始めた。

出発時にタイマーをセットした時計は時を刻み続けていた。3分ロスしてしまった。私の時間への挑戦はベースキャンプへ戻るまで続いている。登りのC3(6400m)あたりから高度障害が出始めていたが、時間の経過と共に下山ではそれがより顕著になっていった。

明らかに脳への酸素供給が不足し身体がふらついた。登りではほとんど頼らなかったフィックスロープへのセルフも下りではなるべく取るようにした。すでにクライマーズハイになっていた私に恐怖心は全くなかったが、その欠如がリスクである。思考回路は問題ないようで安心した。記録への挑戦よりも生きて帰ることがもっとも大事なことだと言いつける。普通は懸垂下降をする箇所も手でロープを握ってクライムダウンを続けた。

途中、C3へ登ってくるパーティーに足止めを食らう。「頼むから早く登ってくれ」寧ろ「先にいかせてくれ自分なら2分で通過でき



C2からアマダブラム頂上を望む

るから」と心の中で叫ぶ。結局先に登り始めていた彼らを待つほかにここで20分待たされた。C2に到着し、デポした荷物を回収し、登山靴をアプローチシューズに履き替える。狭い岩尾根に作られたテント村は小便の臭いがきつく吐き気がした。同じロッジに滞在しているシェルパが「コングラチュレーション」と私の登頂を喜んでくれた。まだタイムを計っているからと言って下山を続ける。

C2下のイエロータワーで女性がユマールにぶら下がりながら泣き叫んでいる。いくらフィックスがあろうとも初心者がこんなところ来ちゃ駄目に決まってる。シェルパ達による過度な商業登山の闇だ。少なくとも一時間はかかりそうな女性を横目に別のフィックスロープを使い懸垂する。助けてやりたかったが、こっちとて人生に一度きりの挑戦をしているんだ。ここで台無しにする訳にはいかない。徐々に足の筋肉が酸素不足で動かなくなってきた。太ももが上がらない。ガレ道に足を取られながら走り続けた。

ゴールであるベースキャンプが眼前に迫る。



アマダブラム・頂上にて

なんと広島隊の太田さんがマラソンの応援のようにトレイルにいてくれる。その上、私の動画を撮影してくれている。シェルパもポーターもない、一人の挑戦ではあったが、太田さんの一言「トシ君のチャレンジに感動したよ」。に仲間の暖かさを感じ、自分のチャレンジを誇らしく思った。

ファストマウンテニアリングと

FKT (fastest known time)について

今回の計画の名称となっているファストマウンテニアリングは、私が勝手に便宜上作ったものである。日本語に直訳すると速攻登山である。整備された登山道を走るトレイルランとは違い、私のファストマウンテニアリングは氷河、岩稜、雪壁など山に存在するあらゆる地形を一秒でも早く登り、頂上に立つことを目的にしている。そのため、登山技術は勿論、アイスクライミング、ロッククライミング、ランニング全ての能力が必要になる。私はもともとカナダでアルパインクライミングのトレーニングの一環として始めた。

その後、FKT (<https://fastestknowntime.com/>) というウェブサイトと出会うことになる。このウェブサイトは世界中のあらゆる登山道、バリエーションルート(登山以外の例えばカヌーなどでもよい)の最速タイムを会員同士で共有し、タイムを競うものでコロナによる集団行動の規制がこのFKTの存在を大きく飛躍させ、欧米の有名なトレイルランナーやスキーレース競技者達が自身のトレーニングのツールとして使い始めた背景があ

る。

このFKTと出会ってからアルパインルートでの記録を見てその速さに驚き興味を抱いたのであった。例としては、ツェルマットからマッターホルン往復3時間以内などがある。

カナダでの2年間のトレーニングと経験を積んだ私は、それをヒマラヤの高峰で実践したいとの思いに馳せられた。その思いが今回のマナスル・アマダブラムのファストマウンテニアリングに繋がったのである。

クライミングのグレード(難しさ)と同様、タイム(速さ)も数字に対する人類の挑戦である。アマダブラムをベースキャンプから見上げた時、この山を10時間以内で往復できるとどれだけの人が想像できるだろうか。自分もトライするまでは半信半疑であった。数字では表すことのできない冒険的な登山も好きだが、それと同時にクライマーとしての能力も私は追求していきたい。

最後になってしまったが、私の極めて個人的な挑戦を理解し、応援してくれた日本山岳会本部及び東海支部の諸氏の懐の深さに敬服するとともに、衷心より感謝申し上げたい。

登山メモ

登攀者

山田利行(37歳)

日本山岳会東海支部員(会員番号15225)

カナダカルガリー市在住

マナスル(ノーマルルート)

2022年9月3日～10月3日

最高到達点6850m

シェルパレス

アマダブラム(ノーマルルート)

2022年10月10日～10月28日

BC～頂上 5時間42分、BC～BC 9時間32分

レコードタイム

シェルパ、ポーターレス

※ 本登山は、正式名日本山岳会東海支部創立60周年記念マナスル登山隊であり、支部の主催事業である。単独でBC～頂上～BCを往復する計画であった。アマダブラムは、マナスルを断念し転戦したものである。

尚、本登山については、日本山岳会の海外登山助成金及び東海支部のチャレンジ基金が助成されている。

北アルプス全山縦走

～三百名山 31 座のピークハント～

青年部 草野 駿希

計画について

海拔0mの日本海の親不知をスタートして北アルプス内にある日本三百名山のピークハントを単独で行う。全装備を最初から背負って途中で補給しないこととする。ただし、水については小屋などで購入も可とする。つまり、食料42日分を担いでスタートすることとなり、ザックの重さは水を入れて33kgとなった。宿泊についてはテント泊とする。そして、ゴールまで完全人力踏破とすることを目標とした。

ここで日本三百名山のピークハントを決めたのには理由がある。日本三百名山とは日本山岳会によって選定された山々なのである。日本山岳会東海支部の一員として、これらの山々を登ることは意味があると思い計画した。

また日本三百名山について調べると北アルプス山域としては34座あることがわかった。その中で毛勝山、鋸崎山、鉢盛山の3座については主脈から遠く人力のみで行くには困難であると判断して今回は行かないと決めた。そうして、残りの31座を単独でかつ無補給でのピークハントをすることを決めた。



全装備の写真

北アルプス全山縦走のチャレンジ

1つ目の難関としては海拔0mからの北アルプス主脈への標高上げであった。親不知海岸をスタートしてひたすらに登り続けた。初日は猛暑日で標高の低いために体に応えた。ただ、この日の夜からは台風が通過するので安

全地帯で凌ぎたいと考えて白鳥小屋を目指し歩き続けた。全日程のテント泊を考えていたが初日でテントを壊してとも思い、無人小屋での小屋泊とした。翌日も雨、風が強かったが梅海山荘まで歩き、この無人小屋でも小屋泊した。どちらの無人小屋も小屋泊者は協力金として2000円なので後立山のテント泊よりも安いくらいである。



9月19日 日本海の親不知より入山

序盤は天候のは恵まれず、雨には苦勞したが停滞なしで不帰ノ嶮の手前の天狗山荘までやってきた。ここでは、後ほど話す唐松アルバイト時にお世話になった天狗山荘支配人、また他のスタッフさんにととても良くしていただいた。山荘の雰囲気も落ち着いていて、建物も山に馴染んで綺麗である。以前にお邪魔したときにいただいた名物の天狗鍋も美味しかったので来年も行きたいと思う。皆さんもぜひ、一度行ってみたいはかが。

天狗山荘を出発する日はパラパラの雨であった。この日は難所の1つの不帰ノ嶮の通過であった。雨で滑りやすく、ザックも30kgを超えて、大きいゆえに左右に振られやすいため苦勞したが唐松岳頂上山荘に到着した。

ここで、3日間だけアルバイトをした。私は今年の7月中旬から9月中旬までの2カ月間は、この唐松岳頂上山荘でアルバイトをしていた。今年から唐松の支配人が変わり、新しく東海

支部員でもある瀧根正幹さんが支配人を務められた。その瀧根さんから誘われて唐松岳頂上山荘で働くことになった。今までは登ることしかやっておらず、山小屋の仕事は新しく別の角度からの山を知る素晴らしい体験となった。まず、驚いたのは小屋で働くスタッフさんは多くは登山経験があまり豊富ではないことだ。今回の唐松が北アルプス登山としては初めてというスタッフさんも数人いた。個人的な意見だが小屋で働く人は多くが良い意味で変わりものであると思う。海外を旅してた方や山に限らず、他の方があまりやらない事にチャレンジしてきた人が多く自分も良い刺激をもらえた。

小屋の仕事としては多少の前後はあるが朝4時に起床してお客さんの朝食を作る、そのあと宿泊部屋の片づけ、さらに後は他にも仕事をやって気づいたら夕食の準備といった感じだ。20時頃にはその日の仕事を終えてのんびりしていた。

山小屋については今年は天候が悪くヘリコプターによる荷揚げが順調にはできなかった。そのため八方尾根から食料や売店の品々などの歩荷にも行った。小屋の中でずっと過ごすよりも歩けるので、小屋の仕事のなかで最も好きな業務であったが最も重いときで44kgを担ぎ肩が痛かったのは今では良い思い出となっている。



唐松岳頂上山荘にて東海支部員の瀧根支配人と一緒に撮影

小屋での3日間を過ぎて、翌日からは縦走を再開した。後立山をひたすら歩くこと数日で雲ノ平に到着した。ここから劔、立山方面へと歩き始めた。立山の雷鳥キャンプ場では、

ここまで歩く道中で足の裏の皮がめくれて気分がかなり落ちていた。それとは別に、ここで行動食も尽きかけていた。そこで室堂バスターミナルへと向かった。もちろん帰るわけではない。帰りたいと思う気持ちは今回の山行で最も強かった場面ではあったが、ここでお土産ショップでパンやお菓子などの行動食を買った。

また立山山域では寒波の影響で雪が降った。さほど積もらなかったが紅葉していた山々は白化粧して雰囲気が変わった。その後は雪の影響は大きくは受けずに歩き、雪も数日で消えた。ここから穂高を目指して稜線を歩き続けた。

穂高山域に到着して今回の山行で技術的には最も難関なエリアを歩いた。大キレットに関してはあっけなく通過したが穂高岳山荘からジャンダルム、西穂区間については縦走装備では苦戦した。無事に西穂山荘に着いて、そのまま上高地へと下りた。上高地では日本山岳会の所有する山研に寄ってご挨拶した。



10月13日 今回の山行の最高峰となる奥穂高岳3190mに登頂

その後は蝶ヶ岳や常念岳、表銀座の稜線を歩いた。その中で今回の山行で最も体力的に厳しい日があった。10/16の登山28日目、行程としては大天荘から燕岳、餓鬼岳、そこから中房温泉へ下りて有明山をピストン、合戦尾根から再び稜線へ上がり大天荘へと至る行程を1日でこなした。これは燕山荘のテント場が予約が必要で面倒に思い、今回の行程を実行した。この日だけで歩行距離42km、獲得標高は5000m以上を記録した。さすがに、かなり疲労したが翌日も行動した。

そこからも順調に歩き最後の乗鞍岳をピークハントして山行を終えた。



10月20日 登山32日目に31座目となる最後のピーク乗鞍岳に登頂

山行を完遂して

今回の山行では今まで以上に人との繋がり、温かさを強く感じた。まずは夏の2ヶ月間、働いた唐松岳頂上山荘に到着したときである。唐松の山頂から下りてるときから一緒に働いた仲間達が小屋から手を振って出迎えてくれた。小屋に着くとすぐに皆が集まって歓迎してくれて、とてもうれしかった。また、家族や東海支部の方々からも頻繁に応援メッセージを送ってもらい、がんばる力をもらえた。

また、今回の山行は個人的に利用しているSNSであるTwitterで山行について発信していた。山行中はその発信を見たという登山者から三日に一度くらいの頻度で声をかけてもらえた。一人で歩いているので人と話すこと楽しく、また声援を頂き歩き続ける力が湧いてきた、中には行動食をくださる方もいた。たくさんの方からのご声援をうけて山行を達成できたとあらためて思う。

今回の山行では登山アプリのヤマレコで記録をしていた。最終的な記録としては登山日数33日間、歩行距離530km、獲得標高47262mとなった。単独で補給については行動食のみ途中で小屋などで買ったが食料については42日分を最初から担ぎ最後まで歩き通した。

山行を終えて何か変化があったかと言えば特にならない。まだまだ登りたい山はたくさんある。国内のロングトレイルにもまたチャレン

ジしたい、冬季登攀ももっとやりたい、海外の山にも行きたいと考えればきりが無い。次の大きな山行計画は決まっていないが、これからも、もっと山に登りたいと思う。

最後に今回の山行について家族の応援はもちろん、東海支部の皆様には多くのご支援いただいたことに対して、深くお礼申し上げたい。ありがとうございました。また、山行中に会い関わった方にも、この場をお借りしてお礼申し上げたい。今後もさらなる高みを目指して精進するつもりである。

行程

- 9/19 日本海の親不知、梅海新道～白鳥小屋
- 9/20 白鳥小屋～犬ヶ岳・梅海山荘
- 9/21 梅海山荘～朝日岳～朝日小屋
- 9/22 朝日小屋～雪倉岳～白馬岳～天狗山
- 9/23 天狗山荘～不帰キレット～唐松岳頂上山荘 到着後に同山荘でアルバイト
- 9/24 同山荘でアルバイト
- 9/25 同山荘でアルバイト
- 9/26 唐松岳頂上山荘～五竜岳～鹿島槍ヶ岳～冷池山荘
- 9/27 冷池山荘～爺ヶ岳～針ノ木岳～針ノ木小屋
- 9/28 針ノ木小屋～蓮華岳～船窪小屋
- 9/29 船窪小屋～不動岳～烏帽子小屋
- 9/30 烏帽子小屋～野口五郎岳～雲ノ平山荘
- 10/1 雲ノ平山荘～水晶岳～赤牛岳～鷲羽岳～雲ノ平山荘
- 10/2 雲ノ平山荘～薬師沢出合～薬師峠
- 10/3 薬師峠～五色ヶ原～雷鳥平キャンプ場
- 10/4 雷鳥キャンプ場～立山～雷鳥キャンプ場
- 10/5 雷鳥キャンプ場～奥大日岳～雷鳥キャンプ場
- 10/6 雷鳥キャンプ場～劔岳～雷鳥キャンプ場
- 10/7 停滞
- 10/8 雷鳥キャンプ場～五色ヶ原～薬師岳～薬師峠
- 10/9 薬師峠～黒部五郎岳～三俣山荘
- 10/10 停滞
- 10/11 三俣山荘～双六小屋～笠ヶ岳～双六小屋
- 10/12 双六小屋～槍ヶ岳～槍ヶ岳～大キレ

	ット～穂高岳山荘	10/18	小梨平キャンプ場～霞沢岳～小梨平キャンプ場
10/13	穂高岳山荘～奥穂高岳～西穂山荘～山研小屋～小梨平キャンプ場	10/19	小梨平キャンプ場～焼岳～道路12km徒歩～平湯キャンプ場
10/14	小梨平キャンプ場～徳沢～蝶ヶ岳ヒュッテ	10/20	平湯キャンプ～平湯乗鞍登山道～乗鞍岳～平湯キャンプ場
10/15	蝶ヶ岳ヒュッテ～常念岳～大天荘	10/21	平湯キャンプ場～道路歩き～沢渡バスターミナル
10/16	大天荘～燕岳～餓鬼岳～中房温泉～有明山～中房温泉～大天荘		※登山日数33日間。歩行総距離530km。獲得標高47262m。
10/17	大天荘～水俣乗越～小梨平キャンプ場		

東海支部チャレンジ基金への寄付のお願い

(公社) 日本山岳会東海支部では、弊会所属の支部員が挑戦的な活動を支援するため、チャレンジ基金を運用しております。

今回は、以下の活動へのご寄付をお願いいたします。

「ヤマトシ支援プロジェクト」直近の活動を支援したいと思います。

○ アラスカ・デナリ周辺でのアルパインクライミング (2023年春予定)

※ 計画が変更、延期になる可能性もあります。その場合も以後の活動基金として返金することはありません。

※ 活動は2025年まで続くことになっております。

主な予定 2023年 秋、ヒマラヤでの高所アルパインクライミング
2024年 春もしくは夏、ヒマラヤでの高所アルパインクライミング
2025年 春もしくは夏、自身の集大成となる登山の実践

【寄付の方法】

下記口座へ振込みの上、東海支部総務委員長 今津まで 電子メールにてご連絡をお願いします。

- ① 住所、氏名、会員番号、携帯連絡先
- ② 振込み金額、日付、法人は会社名も記載
- ③ 一口単位 @5,000円

(10口50,000円以上のかたは、ご希望で法人広告を支部報に載せます)

※ 一口以上、上限はありませんが、100万円以上の寄付は事前にご連絡願います。

④ その他

日本山岳会は公益社団法人であり、ご寄付は税法上優遇措置を受けることができます。
詳しくは本部HP <https://jac1.or.jp/about/donation>
領収書および税額控除証明をご住所へ郵送します。不要な方はご連絡願います。

【山トシ基金口座】

三菱UFJ銀行鶴舞支店 普通預金 0105162
公益財団法人日本山岳会東海支部 支部長 高橋 玲司

【連絡先】

imazu.eiitirou@maroon.plala.or.jp 東海支部総務委員長 今津 英一朗

秋のブラインド登山

ボランティア委員会委員長 前田 隆久

2022年秋、ボランティア委員会はコロナ禍から完全には立ち直れなかった。

秋に予定していた幼稚園児との「親と子のふれあい登山教室」と、家裁からの委託行事「タンポポ登山」が中止になった。そんな中、ブラインド登山者との山行は、4回企画され、その内3回が実施された。(1回は雨天中止)

最初は、10月1日(土)・2日(日)の委員会合宿登山で、岐阜県揖斐川町「揖斐の庵」に宿泊して、伊吹山北尾根・国見岳(1126m)への登山と、伊吹山山麓・播隆上人記念碑を見学した。二つ目は、10月29日(土)・30日(日)のひまわり登山で、愛鷹連山・黒岳(1086m)と沼津アルプス・鷲頭山(392m)に登った。沼津アルプスは、低山の連らなりではあるが、やせ尾根、固定ロープのある岩場、急な登山道と緊張を強いられる登山であった。コロナ感染症の第7波と第8波の谷間に当たり、なんとか泊り込みの山行が実現した。2回とも3名のブラインド登山者と委員会メンバーが多数参加して、天気にも恵まれた登山、夜の懇親会と久しぶりのゆっくりとした山行を楽しんだ。

三つ目は委員会の年間のメイン行事、11月6日(日)に行われた秋のブラインド登山である。名身連の大型福祉バスを利用し、名古屋ライトハウス情報文化センターの機関紙「みちしお」による公募を柱とするブラインド登山は、春に続き今年度2回目のブラインド登山の開催となった。

10月まではコロナ感染症で、定員が20名に制限されていた福祉バスも、11月から定員が緩和され、7名のブラインド登山者と、東海ユース、東海学生山岳連盟の学生を含む23名のサポーターが参加した。山麓は紅葉、登山道はシロモジの黄葉で彩られた秋晴れの三河・夏焼城ヶ山(889m)を楽しんだ。紅葉シーズンの渋滞にも巻き込まれることなく、ほぼスケジュール通りに無事終了した。

今回も、委員会以外の参加して下さった多くの支援者から「色々気づきがあった」「楽しかった」というたくさんの言葉をいただいた。これらの言葉に委員会の目指すブライ



夏焼城ヶ山にて

ド登山の意義が含まれている。

以前、ルームで講演して下さった名古屋ライトハウス情報文化センター原田良實氏(元所長)の言葉を紹介する「視覚障がい登山者にとって登山は非日常であり、視覚以外の感覚を磨く場であり、その豊かな経験が豊かな人生に続く、ともに山を歩む者との信頼関係の構築、人生での大きな財産となる。サポートする登山者にとっても、ブラインド登山は、障がい者感が劇的に変わる瞬間の体験で、ブラインド登山者という新たな隣人との出会いであり、人としての幅を広げるものである。」

最後に、ブラインド登山に参加された全盲のブラインド登山者からの感想文の一部を紹介する。

「先日はありがとうございました。天気も良く最高でした。紅葉も目に浮かぶようでした。風景や木々などいろいろなこと話しながらの登山楽しかったです。知らないことばかりですが、何も不安なく楽しく、バスでもずっと話しながら、時間も短く感じられました。今、うまく言えませんが、なんか、祭りのあとみたいな。ますます山岳会に入りたくなりましたよ。本当にありがとうございました。」

このブラインド登山者も、いつか東海支部に入って、支部の仲間として、一緒に登山を楽しんでくれる日が来ることを信じている。

2023年も感染症は予断を許さないが、今まで積み重ねてきたボランティア委員会行事の全てを、心置きなく行える日が、少しでも早く訪れることを願ってやまない。

山岳古道調査活動の報告（3）

支部古道調査委員会委員長 西山 秀夫

晩夏の大和路から大台ヶ原山へ

2022年8月20日～8月21日

参加者：西山、村瀬、井波、武内

尾鷲道の踏査を目的に大台ヶ原山へ向かった。久々のロングドライブになった。

朝7時メンバー4名が同乗。金山駅前を出発。東名阪から名阪国道へ。針ICから国道をつなぎながら晩夏の大和路を走った。名阪国道を針ICで出て、R370を走るとかつて登った貝ヶ平山の東の香酔峠を越える。玉立（とうだち）の交差点を左折してR370から離れる。

榛原市街を迂回する地方道を抜けて宇陀川沿いで再びR370に戻る。ひたすら南下して窪垣外で吉野川に出る。ここは高見山からの高見川と大台ヶ原山からの吉野川が合流する地点で、流れは複雑な地形通りに蛇行する。中央構造線の影響だろうか。活断層だから大きな地震に見舞われてきたことだろう。

中央構造線と災害を結び付けると有名な寺社が建っていることが分かった。

「奈良県吉野郡（よしのぐん）ほか。紀伊半島の中央部・吉野山（よしのやま）から大峰山（おおみねやま）にかけての山岳地帯のこと。古くから山岳信仰の地として知られてきている。

大滝ダムの建設で水没する前に発掘調査が行われた丹生川上神社上社（にうかわかみじんじゃかみやしろ）の境内では、11世紀ごろの祭壇跡だけではなく、縄文時代の祭祀遺構も見つかっている。

第40代天武天皇（てんむてんのう）は、この地域にある吉野宮に隠棲したのちに挙兵しました。また、第41代持統天皇（じとうてんのう）の行幸の記録も残っている。

天川村にある有名な天河大弁財天社（てんかわだいべんざいてんしゃ、通称は天河神社）は、役小角（えんのおづの）が創建したと伝わる古いお社。

芸能の神を祀る神社であるとともに、近年はパワースポットとしても有名ですよ。」とあった。

R370は矢治から吉野川を渡る地道に入り、尾尾でR169に合流する。ここから中央構造線沿



尾鷲道から尾鷲道に進むと途端に狭くなり状態が悪くなる。地元ボランティアグループが道標を整備した。

いの紀ノ川の源流の吉野川に沿う道になる。

ここまで奈良市、宇陀市、吉野郡吉野町と南下してきた。つまり「南朝＝吉野朝廷は、鎌倉幕府滅亡後に始まった建武の新政に失敗した後醍醐天皇などの大覚寺統の天皇が、京都の都を逃れ奈良県吉野郡吉野町や奈良県五條市西吉野町などを本拠とした朝廷」のエリアをドライブしてきた。

名物の柿の葉寿司を仕入れる

R169からは吉野川の陰谷沿いの道になり。杉の湯の道の駅で柿の葉寿司を仕入れる。正岡子規が有名な

柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺

と詠んだごとく柿は奈良県の名産だ。柿の実のみならず葉も寿司に利用するわけだ。葉はビタミンCが多く防腐剤になると言われる。鯖の生き腐れというのような鮮度の短い魚はすぐに塩でしめて柿の葉で包むことで発酵を促す。

近くには古刹丹生川上上社もあるが今回はパスした。

登り一辺倒のR169はやがて入之波温泉への分岐をやり過ぎす。標高400mの大迫ダムからループ式トンネルを通過して標高700mの大台ヶ原へのドライブウェイ入口になる。入ると途端に道が狭く薄暗くなる。対向車は殆どないが時々ぬっと現れる。伯母峰峠1000m位から周囲が開けて稜線の道になる。大台ヶ原・標高1570mの冷涼な高原に着いた。



大台ヶ原山の最高点・日出ヶ岳にて

大台ヶ原山に登る

午前10時50分に到着。土曜日とあってPは閑散。とりあえず晴れているうちにと日出ヶ岳を往復した。山頂展望台からは熊野灘が見えた。往復1時間半程度。宿のチェックインは15時であるがまだスタッフも見えない。

下山後は大台教会も訪れた。ここへの登拝の道が尾鷲道である。人影はないが御神灯は点いていたので参拝をさせてもらった。

宿は心・湯池館。最初は7名で申し込んだが最終的には4名になったので大部屋に代えてもらった。大部屋は文字通り何十人もの布団がすでに敷いてあったが4名と隣のルームに女性の2人連れのみだった。

ここで夕食の18時まで缶ビールで歓談した。夕飯のメニューは猪肉のミニ鍋が付いたごちそうが出た。

8月21日 尾鷲辻へ

朝6時ごろ起きた。外はざーざーぶりの雨だった。計画が流れてゆく感じがした。朝7時の朝食をとる。焼鯖が旨い。ザックを整理して外に出るがまだ傘が要る。車の外で準備中に雨が止んできた。それじゃとカッパの上着のみ着て尾鷲辻への踏査を試みた。

登山口は日出ヶ岳と同じだが少し先で右へ分かれた。昨日と同様にオーバーユースに備えてほとんどはコンクリートで固めてある。そしてほぼ水平の道である。日出ヶ岳から流れるシオカラ谷の流れは1540mなのでやや下り気味であり、1580mの尾鷲辻まではやや登り気味である。尾鷲辻には東屋が建っているので雨具のズボンも着用した。近くにはオレ

ンジのテープが巻いてある。これは下部では尾鷲道の印、青色は松浦武四郎の歩いた標になっていた。

尾鷲道をちょっと足を踏み入れる。東屋を出ると今までの整備され過ぎた道とは違い途端に山道らしくなる。それに雨水も溜まって歩きにくい。比高80m下って1550m付近からジグザグの巻き道の下りに入る寸前で引き返した。

できれば堂倉山の山頂でも踏めれば良いかと控えめの目標はあった。ここから1500mまで一気に下がり、さらに1450mまでだらだら下ると堂倉山との鞍部である。約20m登り返すと山頂だ。約150mの比高を登り返すのだが雨では止む無し。

尾鷲道の道標のある下り道の始まりで引き返したが往きには気が付かなかった道標も見つかった。昭文社の地図でもこの先は未整備を示す破線路になっている。つまり古道のまま廃道の運命であり、わずかな好き者が歩いているに過ぎない。

途中に避難小屋はなく、水場は地図にはあるが実際には流れていなかった。常水ではないので縦走には大量の水を担ぐから体力とRFの力が試されるコースである。

山上に戻ってビジターセンターの軒先で濡れ物を脱いで乾いた着物に着替えた。雨は小止みになり大峰山脈付近には晴れ間も見えた。終わったら晴れたのだ。成果は挙げられなかったが尾鷲道への知見は若干でも深まった。

名古屋へ帰る

帰路についた。朝方の大雨だどがけ崩れなども心配したのである。ドライブウェイを走ると稜線と路上が同じになるので川上村の山々が見えた。中でも雲海に浮かぶ白髭岳の三角錐の立派な山容が素晴らしかった。日出ヶ岳に登った際はついぞ気が付かなかった。1378mの標高は300m以上も低いので目立たないのだ。1403m辺りだろうか。同じ目線の高さで堂々と聳えている。今西錦司が83歳の時、1500山目に登った記念碑的な山である。

伯母峰峠もまた来てみたいところだった。そこからぐんぐん高度を下げてR169に出た。後は同じ道をたどり帰名した。

コロナ下の森づくり

猿投の森づくりの会代表 和田 豊司

1. コロナ下の森づくり

2019年12月中国でCOVID-19ウイルスによる発症が報告されて丸3年が経過しようとしている。世界中で活動制限が敷かれる中、猿投の森づくりの会でも各種イベントは中止してきた。しかしながら森づくり作業においては3密が避けられる上、屋外でお互いの距離を取らなければ作業ができないため活動中の感染リスクは非常に小さいと判断し、定例作業は中止してこなかった。



東大演習林での間伐作業

県有林「やまじの森」での人工林の間伐や雑木林の手入れによる環境林整備、保健保安林としての機能維持、東京大学研究林での間伐、自然観察会など年間計画は予定通り進んでいる。ワクチン接種が進み、重症化リスクも減少した今年の秋からはイベントや研修（わいがや講座）も再開した。

2. 森の探検隊

再開の先頭を切ったのは“森の探検隊”である。森の生物に直接ふれる体験を通じて豊かな自然観を身につけてもらいたいとの趣旨で「ひなご幼稚園」の園児を森に招いている。

特に今年からは探検要素を刷新し崖登り、

丸太渡り、スラックラインなどを入れた。園児たちは大人の手を借りることなく園児どうしが遊びをあみだし森の中の大地を思う存分走り回り楽しんでいた。

丸太渡り



崖登り

3. 法人デー

法人会員として協賛して頂いている方々に森づくり体験をして頂く活動日を毎年開いてきた。今回は久しぶりの開催であったため新しい企画を入れた。従来県有林内で実施してきた。今回「火」を使ったかった

（県有林内では火の使用が禁じられている）ため“山桜フィールド……JAC所有地”での開催



芋ほり

である。

猿投の森入り口にある耕作放棄地（今年から有志で畑作りを始めた……ゆめファーム）で“さつまいも掘り”をした後、森に入り尾根を歩いて山桜フィールドへ。間伐体験、焼き芋作り、豚汁、森で収穫したシイタケを焼いて楽しんだ。間伐体験ではノコギリで伐倒したが参加者からはチェーンソーを使ってみたいとの要望も聞かれた。将来森づくりの会員候補であろう。火を焚いて熾火を作り、その中に濡れ新聞紙に包んだ上にさらにアルミフویلで包み熾火の中に入れる。数十分を取り出し熱々をほおぼって“おいしい”の歓声上がる。



間伐体験

4. わいがや講座

わいがや講座とは“自由な発言の下、会員の相互理解、環境・自然・生物多様性・SDG'sなどの科学的基礎知識の習得、森づくりの方法などを議論する。関係する各界のスペシャリストから情報を得る等により個人の資質を高め猿投の森づくりに生かす”活動である。



今井森林愛護会との交流

5月には県有林事務所長を招き、「愛知県の森林・林業基本計画と県有林、やまじの森」について、7月には今井森林愛護会の谷口氏を招いて「省エネ・自然エネに人が協力する意義？」と題して講演会を開いた。12月には犬山で間伐材を熱源として活用している新設の老人会議施設を見学し、間伐材の伐採に協力する交流を実施した。

5. なごや環境大学

毎年下半期に4回、なごや環境大学の講座として森づくり体験をベースにした講座を受け持っている。今年度は“猿投の森を楽しみながら、森のめぐみ・森の大切さを体験しよう！”と題して12月から開催する。腐葉土作り、シイタケ植菌、森の手入れなどの講義を森でおこなう。

このように当会ではコロナ下でも活動のペースをほとんど落とさず森づくりに励んでいる。

東海支部では60周年記念事業として「東海山岳No.12」を発行いたします。

2012年から2022年までの支部の活動を掲載しました。2月中に発行の予定で、1冊3,000円（予定）です。

また、東海支部報の合本版も編集作業中です。こちらは2月末の発行を予定しています。

購入を希望される方は支部編纂委員会の委員に申し込みをお願いします。

メール等でのお問い合わせ先は

khoshi@katch.ne.jp 星 一男まで



東海山岳No.10、No.11

ゴザフェス 2022 を振り返って

東海学生山岳連盟委員長 丸岡 春香

2022年10月15日、16日に御在所フェスティバル(通称:ゴザフェス)を行いました。今年には20人以上の学生が集まり、懇親会、クライミングや登山をして交流しました。同志社大学や信州大学と遠方からも参加していただき、普段交流のない学生とも話すことができ、新たな刺激を得ることができたと思います。また、青年部、山行委員会など東海支部の皆様や学連OBにもご参加いただき、小屋での新しい出会いもあり、学生だけにとどまらない幅広い交流をすることができました。直前のお声かけにもかかわらずご協力くださった皆様、ありがとうございます。

私が関わってきた過去のゴザフェスから振り返ってみようと思います。この経験が来年以降の運営においても役立つことを願って…。

19年、1年生の時は大学の夏合宿と日程がぶついていたため不参加、当時は来年以降にでも参加できたらいいだろうと思っていました。ところが20年はコロナ禍により、例年通りの開催ではありませんでした。開催時期を10月にずらし、参加者は土曜の午後に藤内小屋に集合、日曜日にクライミングや登山をするという形式でした。この時は一委員として少しは運営にかかわりましたが、満足に準備もできないまま当日を迎えたような記憶があります(そのわりに人数は集まっていた)。さらにその翌年、いよいよ自分たちの世代が主体的に運営する立場になったわけですが、懇親会の参加者は5人にまで減り、日帰りでの参加も5人しかいませんでした。懇親会があまりに人数が少なかったため、日向小屋に集まっていた青年部の方々の所へ行き、お話をしました(これが青年部との出会いであり、委員長になれと言われたのもこの時でした)。

東学連委員長として活動した今年は、なんとかゴザフェスを盛り上げようという気持ちだけはあったのですが、自分が知っているゴザフェスは先に述べた通り例年とは違うものでした。運営について正しく理解しないまま、なんとか学連の活動を盛り上げようと定期山行の計画などをしているうち、気が付いたらゴザフェスの季節が迫っていました。直前に



なって大慌てで準備を始めようと学連のフォルダを調べていたら、先人たちが残したゴザフェス運営資料が見つかりました。それによると、例年は4月から下見などの準備を始め、藤内小屋への連絡、数か月間しっかり広報活動をした後に参加者の確定、リーダーの選定を行っているようでした。時すでに遅し。こんな立派な資料を残してもらっているなんて知らなかった…！後悔先に立たずで、できる限りのことをするしかありません。他の委員と話し合うといっても予定を合わせる時間もなく、ポスター作成から買い出しまで、ほぼ一人でやりましたが、協力してやればもっといい会であったと思います(ポスター作成でアドバイスをくれた地元の友人、前日の無茶な買い出しに手を貸してくれた母と祖母、愚痴を聞いてくれた先輩後輩に感謝します)。

当日になっても、食材の不足や懇親会の進行やクライミング班の編成などなどいたるところで不備があり、参加者の皆さんに気を遣ってもらったところも多々ありました。また、前尾根のリードができる人材が不足するということもあり、自分も含めもっと技術向上しなければならないということを痛感しました。

それでもゴザフェスを開催するという最低限のことができてホッとしています。今回のゴザフェスが来年以降の開催の一助となれば幸いです。

改めて、開催にあたりサポートしていただいた支部長はじめ東海支部の皆様、藤内小屋の皆様、参加してくれた学生にお礼申し上げます。ありがとうございます。

東海岳人列伝(22)

アルピニズムの伝道者・湯浅道男

編集委員 西山 秀夫

湯浅道男氏とは東海支部の支部長時代（第六代支部長 1990～1994）に役員会の会合で親しくお声をいただいたことが氏を知るきっかけになった。

湯浅「西山君、あれ読んだよ、あれで良いんだよ」

私「えっ！」

湯浅「岳人に投稿していたじゃないか。他の山岳会員とも登山を通じて交わるってこと」
私「ああ、石徹白の野伏ヶ岳に名古屋山岳会の大口先輩とスキー登山した、あの記録のこと・・・」

「岳人」のコラムの投稿記事を読んでもらったのだ。こんな何でもない会話で他の山岳会と交わることが、湯浅氏にはいたく好ましいことと知ったのはずっと後のことだった。

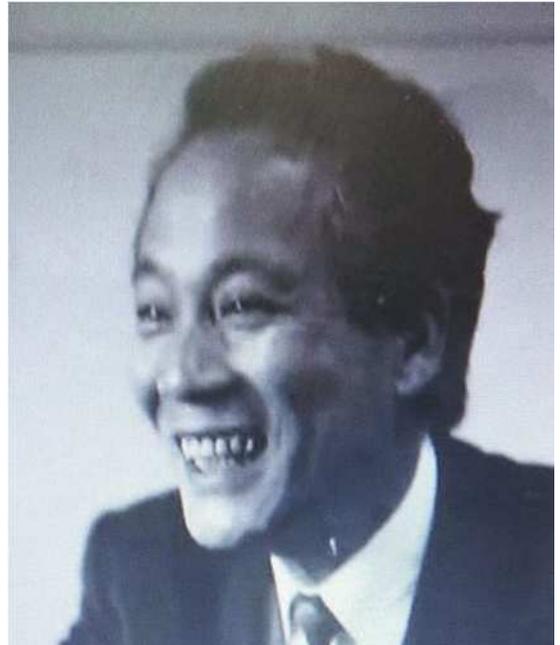
それで、藪山派の私にとっては分野の違うアルピニストらの本を読んで理解に務めていった次第である。その中で、佐瀬稔『喪われた岩壁 第2次RCCの青春群像』（1999年、中公文庫）を手にしたら湯浅先生の御名前も出ている。むさぼり読んだのは言うまでも無い。そして失礼とは承知しながらまた役員会の会合の合間に質した。

私「湯浅先生って、ぐれていたんですか。佐瀬稔の本に書いてありましたよ」

湯浅「あんな本は読まないでくれ・・・」と顔色を変えて一蹴されたのだった。どうも先生の逆鱗に触れたような気がした。一般に公刊された本の内容とはいえ、礼儀を失したと反省もした。

そうか、東海支部の支部長というより、愛知学院大学法学部教授の肩書きで社会的地位を得た今は世に出したくない、知られたくないプライバシーでもあった。

しかし、数々の登攀歴や業績は後述するとしてもこんな意外な部分を語らずして評伝にはなるまい。こんな貧しい青春時代の苦労が後の人間形成の基礎になったと思うからだ。彼の世でこっ酷くお叱りを受けるのを覚悟して適宜引用したい。



青春時代の逆境が湯浅道男をつくった

略歴は昭和12（1937）年1月 千葉県成田市生まれ。父親は公務員（警察官）。日大三中から日大三高に進む。高校2年までは野球部に所属するが、三年の時、野球部大型化の方針で退部させられる。そのころからぐれ始める。身体は小さいが腕っ節が強く、喧嘩をして歩いては何度か停学処分を受ける。

東大を受験して失敗。昭和30（1955）年（18歳）、高校を卒業後、中小企業に就職。コンドームの総販売元で重い荷を担いだりする仕事だった。同僚の山好きに誘われて山登りを始めた。

「日本中が貧乏だったし、僕も明るい見通しなど余り無かった。はじめは丹沢、それから谷川岳とお決まりのコースでしたが、何かから逃げ出すというか、逃避的な気分で山に通っていたように思います。暗い気分といったらきざな言い方で、いわばやけくそのようなものではなかったでしょうか。以下略」

「飯田橋駅近くの『梓』へ行って、奥山章さんという人を知ったのはそのころのことです。」という文章を今更に読み直す。実は後

の平成12(2000)年に『ザイルを結ぶとき』(yama-kei classics)を読んだ。その中で奥山章の年譜を編纂した人が湯浅先生であった。これではじめて湯浅先生と第二次RCCの奥山章との人間関係の密なることを把握したのだった。第二次RCCこそは山岳会の壁を越えて登攀で交わっていた先鋭的なクライマーの集団であった。奥山章が雑誌に書いた「北岳バットレス中央稜登攀」(注:『異端の登攀者 第二次RCCの軌跡』(山と溪谷社)の中では「北岳バットレス中央稜冬季初登攀」とある)の報告を読んでショックを受けたという。「ひょっとすると人間はその気になりさえすれば何でもできるのではないか、ひたむきに思いつめさえすれば、そんなことを考えるようになった」一度は諦めた大学への進学、新聞記者への憧れた気持ちがふたたび頭をもたげてきた。「やっぱり新聞記者みたいな仕事をやりたい、それには大学へ行かないとダメだ、一度は諦めたことだけでももういっぺんやり直してみるか、と。そんな考え方ができたのはバットレスのことがあったからなんです。あれで僕の人生の進路は変わりました。

少し金を貯めてあったので、会社を辞め、翌年の春、早大の第二法学部に入り、その後、特待生になってお金の心配がなくなったので第一法学部に移ったんです。」中略。

湯浅先生に心酔している人が多いのはこのような逆境への克己心と強烈なハングリー精神に培われた人間性に惚れるんだらう。親のすねかじりで進学できる経済的に恵まれた今時の若い人には湯浅先生の真骨頂は理解できないだらう。

「当時、山といえば各山岳会とも制服なんか着てやってた時代でしょう。そういう時代に横の連合を作って互いの個性を伸ばす、というのが好きでした。」この件(くだり)も湯浅先生の考え方を如実に著している。先述したように、筆者(東海白樺山岳会)と名古屋山岳会に所属の大口瑛司氏とはともに日本山岳会会員ではあるが、社会人山岳会には他の山岳会員と登山をともにしてはならないとする規定があった。ただ、個人山行ということで大口氏が同行してくれたのであったが、湯浅先生はそれにしぼられまいとする考えがあ

ったのだ。それが冒頭の会話になったのである。

第二次RCCを道場として育つ

昭和39(1964)年に憧れていた第二次RCCに入会を果たす。「新入りとか子供だということは全く関係ないんです。一生懸命やりたいものはそのやりたいことをやれる」魅力にはまってゆく。「山岳会の中だけだと、毎年新人を迎え入れては登山教師みたいなことばかり繰り返させられる。伸び伸びと自分の山を登りたい、同じ志をもった者と横の連絡を取りたい、そう思っても満たされない、そこに第二次RCCができたんですね」

結局は湯浅先生は原真と同じ機能的組織論者であった。機能体とは、外的な目的を達成することを目的とした組織の意味。(原真が嫌ったのは発足時はヒマラヤをはじめとする海外遠征に特化した機能体組織たる東海支部の共同体化だった。『快樂登山のすすめ』(東京新聞)の中で日本山岳会解散論も提言。事実、東海支部を解散する手続きに入っていた。)あれほどの熱意を持ちながら自己を犠牲にして、人を育てることには冷酷な一面を見る。それは次の事実で反転する。

昭和47(1972)年7月2日、第二次RCCの主宰者・奥山章は病苦から自殺。枕元の湯浅道男宛の遺書には「エベレストに登れ」と書いた。以来、自分のことよりも後輩



第二次RCCの会報(ガリ版刷)に健康をふるった
『異端の登攀者』第二次RCCの軌跡

をエベレストに登らせることが使命となる。

国立登山研修所でも若手登山家の指導育成に力を注ぎ、昭和50年代に講師や研修テキスト編纂に勤しんだ。また平成12年3月に起きた北アルプス大日岳遭難事故の調査委員会の委員に選ばれた。法律家ならではの人選であろう。山の遭難事故に関して「過失がなければ」という言葉を覚えている。

海外遠征への志向

湯浅先生は「大学四年間、山に登っているうちに、どうしてもヨーロッパアルプスに行きたくなった。早稲田の大学院に残ることが決まった時も、以下略」

湯浅先生はただのロッククライミングの名人だけではなくなっていた。岩登りを通して自分の人生の高みに導く手段になっていた。こうして岩登りに打ち込むだけでなく、法学にもいっそう打ち込んで法学者への途が拓けてきたのだ。

平成9（1997）年『たかが山登りされど山登り』を私家版で出版されて恵贈をうけた。その中の、冒頭「人生のなかの“アンナプルナ”」に「人生にとって無駄なことは何一つ無かった、と断言」している。濃厚な青春の足跡こそは湯浅先生をより深く知ることになる。

では登攀の足跡を偲んでみたい。同書の記録の章から拾った。第二次RCCに所属しながら、昭和41（1966）年に日本山岳会に入会。東海支部にも所属していた人生の絶頂期である。

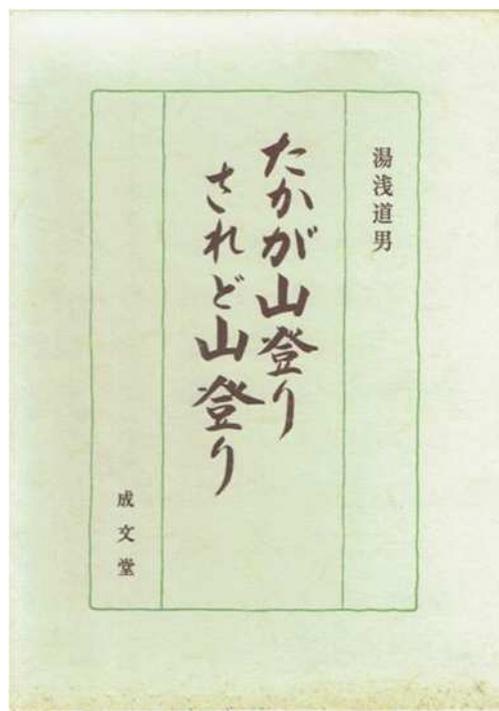
- | | |
|-------------|---------------------|
| 昭和40（1965）年 | ドリユ北壁 |
| 昭和43（1968）年 | コー・イ・バンダ
コールでの遭難 |
| 昭和48（1973）年 | エベレスト南西壁 |
| 昭和51（1977）年 | ブロード・ピーク
登頂 |
| 昭和59（1984）年 | ガウリシャンカール
峰東南稜初登 |
| 昭和63（1988）年 | チョモランマ登山
に参加して |
| 平成 元（1989）年 | シシパンマ登頂 |
| 平成 6（1994）年 | エベレストサウス
ピラ |

東海支部の中興の祖として

『東海山岳NO⑩』の50年史から「1977年4月17日の通常総会で尾上昇が第五代支部長に就いた。副支部長には中世古隆司がなった。以後、このコンビが常務委員会を制していくことになる。東京から望月達夫が来名し、23名の出席を得た。原真の出席を見る。この日以来支部の行事には名前を見ることがない。尾上昇の時代が開幕したのである。

尾上の考えは1977年支部報NO・16に「理想的な支部運営としては、海外登山を初めとする各種の事業や業務が各々平行して活発に展開されることであろう」と表明されている。」

昭和48（1973）年ごろ、マカルー遠征を成功させたにも関わらず、東海支部は解



散の危機にあった。2009年支部報No・119「東海地方の登山史と東海支部16」によると「支部最大の実力者原真と私（注：中世古隆司）が対立し、原病院地下のルームも追い出され、東海支部崩壊の危機に直面した時、湯浅、尾上両君が強力にバックアップしてくれ」と書いている。これに呼応するかのよう救世主として現れたのが湯浅先生

だった。

以下も引用する

愛知学院大学山岳部の台頭

「この年は湯浅道男の影響で愛知学院大学の学生が多数支部行事に参加する傾向が見られる。次の飛躍に向けて徐々に地固めしていくようだ。実際に1979年1月から1980年1月にかけて市橋隆二(7805)はガウリサンカール7146mの偵察に遠征している。1980年はガウリサンカール遠征登山に沸いた。7月9日日本ネパール国際親善隊壮行会は200名の出席を得て盛会だった。26日尾上総隊長以下22名が出発。ネパールでは協力事業が行われた。同時にガウリサンカール登山が実行された。しかし、この年の悪天候と難ルートにあえなく敗退した。

4年後の1984年に成功を見たのであるが、6号まで待たず、その喜びの言葉を5号の序で設立以来20年の「宿命の対決」とし、最後に「東海支部の創始のころは、決して忘れてはならないと確信している。」と結ぶ。」

平成2(1990)年東海支部の支部長に湯浅道男氏が選任された。「『東海山岳』6号の外国登山記録にはガウリサンカール登頂の報告が巻頭におかれた。5号の序の尾上支部長の喜びの言葉を湯浅道男支部長もその序文に引いて実にすがすがしい。8年間も雌伏して支部らしい登山が成功するのを待っていた尾上のことを慮ってのことである。このころは愛知学院大学山岳部をはじめとする若い支部員の活躍の時代になっていた。その指導者として湯浅の存在は大きかった。それだけではない。小川務と徳島和男らの天山山脈・雪蓮峰への遠征は5年間、第4次隊まで執拗に続けられてようやく落ちた。」

この事実をして、湯浅道男氏は東海支部の中興の祖と思う。多くの後進を育てたから名伯楽といってもよい。

東海支部の支部報に湯浅道男の名前を見るのは、1967年1月の「支部通信」⑩号で、愛知県大学山岳連盟での講演会で湯浅は「ヨーロッパアルプス」に関して講演をしたらしい。そして、次号から現在の横書き2段組の「東海支部報」1号に模様替えした。その編集者が湯浅道男になった。NO4までは編集

した。書くことが好きだった。湯浅先生は編集者になるべくしてなったのだと思う。

時を同じくして、前出『異端の登攀者』のR. C. C時報の1967・1でも「山の不在」を執筆。檄文である。かつての松濤明の「ピークハンティングに帰れ」と主意は同じ。第二次RCCの「RCC時報」でも望月亮とともに編集者となっている。1969年の創立10周年では、「外からみたR、C、C内からみたR、C、C」と題した檄文を寄稿した。日本山岳会をして貴族趣味的・高踏主義と評価、大学山岳部のヒマラヤ熱によるポラーメソッド、などと批判的な記述には30歳代の若さがにじむ。

登っては書き、書いては登っていた

そんな湯浅先生も1970年の「マカルー遠征」の名簿には名前が無い。祝賀会にすら出席していない。1978年の「支部報」NO19にやっと名前を見た。「東海支部のこと」と題した巻頭文を発表。1979年NO25で、「ガウリサンカール計画に寄せて」を寄稿。1985年NO33で、「伊藤洋先生の御逝去を悼む」を寄稿。1989年NO42で、「ヒマラヤと私(その1)」の連載を開始。1990年NO44に、「支部長に就任して」を寄稿。1994年NO55では、「支部長を辞するに当たって」を寄稿。次号では愛知学院大学エベレスト登山隊1994」の報告を寺西申生、本郷三好と連名で寄稿。その後もイベントに際してのあいさつ文を寄稿した。

晩年は愛知県山岳連盟会長として活躍

東海支部の支部長を退任後は平成7(1995)年4月、愛知県山岳連盟の会長に就任。平成12(2000)年、愛知県山岳連盟の60年史『あゆみ60年』の巻頭のあいさつ文を山岳連盟会長として寄稿した。

長らく、東海支部では常任評議委員に名前を見たが後にひっそりと日本山岳会を退会された。最後にお目にかかったのは平成23(2011)年の東海支部50周年記念のパーティのあいさつであった。平成30(2018)年4月13日の死去を知ったのは4月15日のことだった。

技術向上委員会

「道迷い遭難講習登山～左門岳」に参加して

支部員 南 成寿

技術向上委員会では「道迷い遭難防止講習会」を机上講習と実地講習で開催した。

机上講習：10月15日(土) 14：00～16：00
支部ルームにて

実地講習：11月6日(日)左門岳にて
コースタイム〈記録〉

8：45～上大須ダムー登山口（駐車）
9：15～林道終点
10：25～10：35 815m地点（ヘルメット）、
小休憩
11：50～12：20 左門岳山頂、昼食
13：20～13：30 815m地点（ヘルメット）、
小休憩

14：30 登山口

〈講習時間：5時間45分〉

参加者：5名

L：清水克宏、SL：竹内誉剛、遠藤 忍、
大矢英詞、南 成寿

感想～南 成寿

支部のメルマガで、技術向上委員会の「道迷い遭難防止講習会」開催を知り、防止策、道に迷った場合の対応策を身につけたいと思い、早速机上と実地講習会を同時応募した。机上講習会は10月15日(土)東海支部ルームで開催され、身近な東海三県の低山でも道迷いの遭難が急増していること、遭難時の対応法まで教わった。

越美山地の左門岳(1224m)での実地講習会は、約3週間後の11月6日(日)、上大須ダム奥の登山口からスタート。林道を進む丸太橋がお出迎え。そこから先頭をリーダーから参加者に交代。ルート不明瞭でルートファインディングの難しさを思い知らされる。地図上のルートではコースの半分ぐらいまで沢沿いの林道が続くが、実際は荒れた林道がすぐに無くなり林業用のモノレールが現れ、暫くそれに沿い登っていく。マーキングのテープが右や左に残るが、どれを信用していいのか。また、沢沿いは踏み跡が流され無くなっており、浅い部分を探し足の置き場に注意しながら沢の左岸・右岸と渡渉を繰り返す。谷の分岐する場所は分かり難く、読図・



815m地点に到着

コンパス・地図アプリで自分のいる位置を常に確認しながら、ようやく815m地点目印の古びたヘルメットに到着。そこで小休憩し、リーダーが新品ヘルメットを追加。さらに1回渡渉し、沢を離れると尾根の急登。暫くするとプラスチックの階段が現れ歩きやすくなる。気持ちに余裕ができ紅葉と青空のコントラストを感じ、落ち葉の踏み音に癒される。尾根筋の上部になると尾根幅が広がり踏み跡が薄くなる。そこでリーダーから「登りで下山の時に迷いやすい分岐や時々振り返って下山時の風景を把握しておく」とアドバイス。遠方の西側を見ると屏風山その奥に能郷白山。近くに目を向けると尾根芯の右側は杉、右側はコナラなどの落葉樹、右と左で植生が違う。山頂手前で藪になり、踏み跡を確認しながら進む。やっとのことで頂上。「万歳する前に来たルート確認して！！」リーダーの一言、以前、下山時に道を間違えて遭難があった山だった。確かに山頂は見通しが悪く来た方向を間違えやすい。

下山は、登りの時点で下山時の風景を把握していたので、予定した時刻より早く下山できた。

今回の講習会でいろいろな対応などを学び有意義な一日でした。

技術向上委員会委員長 清水 克宏

環境省事業モニタリング1000里地調査について

自然保護委員会委員長 井藤 恵美子

自然保護委員会では、2019年より2023年の5年間を山岳会所有のヤマザクラフィールドを調査場所として、哺乳類動物調査を開始した。

モニ1000調査をヤマザクラフィールドに絞る

モニタリング1000里地調査を始めたかどうかの提案があり、調査をすることにより社会に役立つ資料の提供が可能であることが分かり、2017年9月の委員会で多数決により応募することとなった。10月の締め切りに合わせて必要書類を事務局の日本自然保護協会へ提出した。内容は、カヤネズミ、カエル、哺乳類動物調査の3件である。

調査場所を県有林「山路の森」と、山岳会所有の「ヤマザクラフィールド」としたが、県有林での調査許可が下りなかった。理由は猿投の森は、森づくりのためだけに開放したのであるとか、貴重種が出たら、人がたくさん来るようになるので困るとのことであった。

2017年12月にカヤネズミ、カエルの調査依頼が日本自然保護協会より届き、2018年1月末に動物類調査の依頼が届いた。カヤネズミ、カエルの調査地は県有林のサルナシ湿地であるため、止む無く断念し、ヤマザクラフィールドでの哺乳類動物類調査のみを行うこととした。調査を受け持つ委員の活動の軽減にもなることも考えた。

11月に海上の森センターで研修が開催され、6人が参加した研修終了後、赤外線カメラ3台、電池、充電器、腕章等を受け取った。これらの品は調査終了後に返却することになる。ほかに環境省の名入りプレート（返却不要）があった。

モニ1000調査開始

2019年5月に赤外線カメラを設置した。モニタリング調査の始まりである。

猿投の森の動物調査と比較すればヤマザクラフィールドの動物たちはやや小さい動物たちかもしれない。黄金色に輝く毛並みの「テン」やキョトンとした瞳の可愛い「キツネ」

やイノシシ、タヌキなどが撮影できた。勿論大型のニホンカモシカ、大きな角を持ったオスジカも写っていた。動物たちのすみわけがうかがえた。

「モニ1000に呼応し、盛り上げるためのキャンプ」も行った。9人が参加して、カメラの場所を確認し、好天の星空を楽しんだりした。また、自然保護委員に比較的若いと思える人が増えつつある。カメラ操作を覚えるなどの為に調査に加わってもらっている。5年間の調査が始まり、体調に留意し、5年、あるいは10年と調査が続くことを願っている。

5月から10月までの第1土曜日がカメラの設置や回収日である。興味のある方は猿投の森入り口の変電所付近にご集合いただきたい。時間は9時半、一緒に調査しよう。そしてヤマザクラフィールドを楽しもう。

東海支部メルマガ登録のお願い

東海支部ではメルマガ「東海支部だよ」を毎月1回発信して支部からの連絡、行事の案内や各委員会からのお知らせなどを支部員・支部友会員の皆さんに配信しています。また急ぎの連絡を臨時発信することもあります。

このメルマガは登録した希望者に配信されます。**ぜひ登録してください。**

登録は東海支部のホームページの右側メニュー「支部メルマガ読者登録」で簡単にできます。登録が出来ない場合は総務にご相談ください。

登録ページ URL :

<http://jactokai.sakura.ne.jp/shibuhp/modules/pico02/index.php/content0004.html>



東海支部から
のお知らせ
です。



TOPICS 1

「インド・ヒマラヤ」英語版 Himalayan Club 出版賞受賞

「インド・ヒマラヤ」英語版の海外への紹介や頒布などの方法を相談するため、ムンバイの Himalayan Club Office を訪ねた後、ムンバイからコルカタに飛び、「インド・ヒマラヤ」英語版のもう一人のインド人編集者の Kankan Kumar Ray さんと歓談した。Ray さんは、「Handbook of Climbs in the Himalaya and Eastern Karakoram」の著者で、インド・ヒマラヤの登山史に詳しい人である。Himalayan Club のコルカタ支部の中心人物である Debabrata Mukherjee さんも同席し、その夜は、コルカタ支部の登山活動の報告会と受賞式があり、筆者は招待されたが、60名ほどの出席があり、若い女性の出席者も多く、活気ある会合であった。

沖 允人



2022年7月、コルカタにて JAC 東海支部発行の「Indian Himalaya」英語版を手にして歓談。Kankan Kumar Ray、沖 允人、Debabrata Mukherjee の各氏

TOPICS 2

「冬虫夏草」

冬虫夏草は、キノコが昆虫やクモに寄生して、体内に菌糸の核を形成して、昆虫の体の一部などから棒状の子実体を形成したものの総称である。中国では、漢方薬や薬膳料理などの高級素材として珍重されている。

主に、中国の奥地やチベット、ヒマラヤの山中で多く見受けられるが、日本の山では、中々見ることができない。調べたところによると、日本でも300種ほどが発見されているとか。

その「冬虫夏草」10月中旬の個人山行で行った八丈富士(854m・八丈島)の登山



中に見つけた。同行のガイド嬢も初めて見たと目を丸くしていた。漢方薬や薬膳料理の素材だそうなので、丸ごと乾燥させてパウダーにして飲んだり、料理に混ぜるのだろうか。

いずれにしても、本当に薬効があるのか疑わしい。我々日本人には、それ程の有り難みは感じられないのだが。猫に小判である。もっとも冬虫夏草と言っても様々な虫に寄生することから、中国では、オオコウモリガに寄生するもののみ限定しているとか。しかも、これは、大変高価な価格で取引されているらしい。写真の冬虫夏草、オオコウモリガに由来しているとしたら……。長年山を歩いているが、お目にかかった事なく初めての貴重な体験であったのは確かである。(N. O.)

第54回支部友・朝明ミーティング

支部友委員会委員長 金谷 正起

第54回朝明ミーティングが朝明茶屋をベースに10月8日(土)、9日(日)に開催された。60名の方が集い楽しんだ。

8日(土)分散登山

登山学校は3チーム27名、学校に所属しない14名の支部友会員は支部友委員8名と4チームに分かれて登山。

第1パーティ (6名) ☆☆☆山名：釈迦ヶ岳

CL近藤 政仁 コース：朝明茶屋キャンプ場～中道・庵座滝ルートの分岐点～中道～釈迦ヶ岳最高点～猫岩岳・昼食～羽鳥峰手前の林道分岐～羽鳥峰分岐～朝明茶屋

第2パーティ (5名) ☆☆☆山名：鎌ヶ岳

CL倉橋 智司 コース：武平峠P9：24～頂上～湯の山グリーンホテル入浴

第3パーティ (5名) ☆☆☆国見岳

CL村瀬 恭平 コース：裏道登山口～藤内小屋～国見尾根取付～ゆるぎ岩～石門～国見～藤内小屋昼食～裏道登山口～朝明茶屋

第4パーティ (5名) ☆☆☆山名：水晶岳(954m)

CL榊 将美 コース：朝明茶屋駐車場～伊勢谷分岐～中峠分岐～曙滝～中峠～水晶岳～根の平峠～朝明茶屋駐車場

夕食(豪華BBQ) 17:00～

60名の食材は高松、田中、中島の車3台で服田・松本・熊谷・奥野・中島・林の食事班8人によって運ばれて来た。

高橋支部長の開始の挨拶、金谷委員長の乾杯で始まった。



キャンプファイアー19:30～

山の神(尾上委員長)が登場！新人の皆さんがたき火に点火して始まった。(松本司会、磯部、田中の伴奏付き)で歌ったり、楽しいジャンケンゲームとクイズで大いに盛り上がり21時に終了。



9日(日)海外登山報告会・講習会

東海支部 創立 60 周年記念 カンチュンナップ峰登山隊報告 (7:45～8:45)

講師：高橋玲司支部長

クーンブ・ヒマラヤ カンチュンナップ (6089m) 北壁初登攀の記録



東海支部 創立 60 周年記念 インドヒマラヤ登山隊報告 (9:00～10:00)

講師：隊長 星一男

登攀隊長 栗木洋明

シャドール・リ峰(5942m) 初登頂

ドゾ・ジョンゴ峰(6211m) 第2登攀の記録



演習「一般登山道で役立つロープワーク」

講師：榊 将美 参加者12名 (10:15～)

演習「ツエルトの張り方」

講師：高松 信治 参加者3名 (～13:00)

ファーストエイド講習 (13:30～15:00)

講師：菰野消防署署員

登山中での、骨折・怪我・虫刺されなどに対する対処方・応急処置等を 実践を通して体験・見学した。



会員の広場

同好会コーナー

スケッチクラブ

秋の飛鳥路

島田 誠子

10月25日(火)～26日(水)、8名で飛鳥路へ。コロナ禍も少し落ち着き、私には初めての1泊旅行、「今奈良キャンペーン」を利用して半額プラス・クーポン付、近鉄特急「ひのとり」にも心が弾みました。

橿原神宮駅前でレンタサイクルを借り、甘樫丘北麓の民宿へ向かいました。荷物を預けて先ずは甘樫丘へ。展望台からは大和三山を始め、秋の飛鳥路を一望出来ました。

初日は、下見を兼ねて村内の観光・スケッチポイントを、銀輪を連ねて訪ね回りました。飛鳥寺・酒船石・石舞台古墳・マラ石・稲渕棚田・飛鳥川の飛石・高松塚・猿石・鬼の雪隠と俎板・亀石…懐かしくまた初めてと、目が回るような半日でした。

翌日は、各自思い定めた場所へ。私はスケッチの時間を長く取りたかったので、宿から近い飛鳥寺を選択。飛鳥大仏の気高い姿を拝んでから寺の西側へ。暖かい日差しのもとで、満開のコスモスを配した飛鳥寺を…季節の風物詩を描くことが出来、念願叶った半日でした。



石舞台古墳前で

民宿では、恒例の「作品観賞会」…他の方達はどんな絵を描いているんだろう、楽しみと緊張。自分と違った構図や色使いが参考になり、短時間ながら絵に対する思いを共有出来て嬉しかったです。

心の籠った民宿を後に、電動アシストのペダルも軽く、飛鳥の風を切って帰路に就きました。

第8回作品展

村中 征也

コロナ禍で多難続き乍ら、作品展を開催出来、8回目を迎えられたことに感謝しております。

11月9日(水)～13日(日)の5日間、名古屋市の市政資料館・第5展示室に、支部の皆様始め大勢の方を迎えることが出来ました。

会員から31点の作品が集まり、山の絵の他、スケッチ旅行などでの多彩な作品を展示。来館者との絵を介した「山談義」は楽しく、登山とはまた違った有意義な時を過ごしました。

来展者を迎える嬉しい場面、「お～い来たよ」「あれ、どなたでしたか？」となった場面が今回多々…マスクのせいで、コロナ禍の影響がこんな所にも、と感じた会でした。



作品飾付後に整列

スケッチクラブは、支部の掲げる「クラブライフ」を楽しむ絶好の集まりです。興味をお持ちの方のご参加をお待ちしております。

代表…石井仁

事務局…村中征也・岩田智与子

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画(令和5年4月～6月分)

4月1日(土) ☆

山域：渥美半島 山名：大山・雨乞山

リーダー：田中 進

4月2日(日) ☆☆

山域：揖斐山地 山名：池田山

リーダー：榊 将美

4月8日(土) ☆

山域：瀬戸 山名：物見山

リーダー：金谷 正起

4月15日(土) ☆

山域：京都 山名：夜泣峠・釈迦谷山

リーダー：村瀬 恭平

4月15日(土) ☆

山域：瑞浪市・恵那

山名：中山道大鍛宿～榎ヶ根一里塚

リーダー：松本 陽子

4月16日(日) ☆☆

山域：鈴鹿山脈 山名：竜ヶ岳

リーダー：今津 英一朗

4月22日(土) ☆☆

山域：木曾谷・木曾山地 山名：風越山

リーダー：高松 信治

4月23日(日) ☆

山域：三河 山名：宮地山・五井山・砥神山

リーダー：磯部 隆

4月29日(土) ☆

山域：鈴鹿山脈 山名：鈴鹿の上高地

リーダー：金谷 正起

5月1日(月) ☆

山域：田原アルプス 山名：衣笠山・滝頭山

リーダー：田中 進

5月7日(日) ☆☆

山域：静岡市 山名：真富士山

- リーダー：倉橋 智司
 5月13日(土) ☆
 山域：名張市 山名：赤目48滝・長坂山
 リーダー：田中 進
 5月14日(日) ☆☆
 山域：瑞浪市 山名：屏風山ルート
 リーダー：榊 將美
 5月20日(土) ☆
 山域：京都 山名：清滝・松尾山ルート
 リーダー：村瀬 恭平
 5月27日(土) ☆☆
 山域：奥美濃 山名：能郷白山ルート
 リーダー：今津 英一朗
 5月28日(日) ☆
 山域：川辺 山名：遠見山・権現山
 リーダー：奥野 明美
-
- 6月3日(土) ☆
 山域：京都 山名：稻荷山・清水山
 リーダー：村瀬 恭平
 6月3日(土) ☆☆
 山域：奥美濃 山名：大日岳
 リーダー：高松 信治
 6月10日(土) ☆☆
 山域：伊吹山地 山名：国見岳
 リーダー：榊 將美

- 6月11日(日) ☆
 山域：豊川 二川 山名：石巻山
 リーダー：磯部 隆
 6月17日(土) ☆☆
 山域：静岡市 山名：山伏
 リーダー：倉橋 智司
 6月18日(日) ☆
 山域：浜松市 山名：秋葉山
 リーダー：近藤 政仁

山行対象者 支部友会員及び支部会員

申込み方法 ・支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。

・締切日 原則山行日1ヶ月前まで。(締切日を過ぎての参加空き情報はリーダーに直接問い合わせ下さい)

・支部会員は申し込み締切日の翌日以降に、各山行のリーダーへ問い合わせる。

<申込み開始>

・支部友会員は山行日の3か月前から、優先は1ヶ月です。

・支部会員は山行日の2か月前から、山行の募集人員を超えない範囲で参加申し込みを受け付けます。

支部友会員数 令和4年11月末現在/66名

次回支部友ミーティング 開催内容のお知らせ

第56回(予告)「2023年夏山の誘い」

日時：4月11日(火)

講師：山行リーダーが夏山コースを説明します。

リーダー連絡先

尾上 昇 FAX：052-832-3878
 メール：onoe@onoe.co.jp
 金谷 正起 携帯：090-9931-3600
 メール：kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp
 榊 將美 携帯：090-7237-4410
 メール：m.sakaki@minds-consulting.jp
 村瀬 恭平 携帯：090-4186-9876
 メール：hoshizakari@docomo.ne.jp
 田中 進 携帯：090-9191-8666
 メール：t.susumu@peace.ocn.ne.jp
 今津 英一朗 携帯 090-2616-7549
 メール：imazu.eitirou@maroon.plala.or.jp
 磯部 隆 携帯：090-9180-7245
 メール：takass@yk.commufa.jp

高松 信治 携帯：090-3156-5268
 メール：takama2nobu3@yk.commufa.jp
 松本 陽子 携帯：090-7859-4031
 メール：yo-kom@nifty.com
 水野 猛志 携帯：090-5866-3781
 メール：r34668@bma.biglobe.ne.jp
 近藤 政仁 携帯：090-2183-8125
 メール：vft55ud55@gmail.com
 倉橋 智司 携帯：090-8673-7180
 メール：ilyt6by8@qc.commufa.jp
 奥野 明美 携帯：090-9923-4292
 メール：tac-okuno@mbi.nifty.com



東海支部の蔵書からの一冊③④

図書委員長 石田 文男

『現代登山全集 2/槍・穂高・上高地』

編者；諏訪多栄蔵・山崎安治・安川茂雄

山口耀久

《槍ヶ岳は雪に光る山々を威圧して岩の尖峰がそびえて、いかにも高く、その頂の鋭い尖りは強く心に迫って偉大な姿を示す。・・・瞑想的憧憬の念を抱かせる。・・・西穂高岳の登攀、それには狭い氷雪の山稜を、遥か脚下に沈み行く支脈を見下ろし、青い鋼のようなクーロワールの氷を横切り、ピオレを打ち振って鋭い雪庇を渡り、いくつかの峰峰を越えてようやく絶頂の鋭さを仰ぐのである。(西穂高岳/舟田三郎)に目を凝らしていると、いつの間か若き日の山に想いが傾いている自分に気づく。

それは梓川畔の横尾や小梨平をベースに車座になった友と口泡の末、まだ残雪をたっぷり抱いた5月初めで奥穂、蝶、西穂沢から西穂、八右衛門沢の上部の岩と雪のルンゼをつめての霞沢岳などを放射状に登ったのはつい昨日のこのようで、さらにまた機会があればまだ登っていない峰々へと思いが馳せていく自分があった。

「上高地と牧場の四季」や概説「槍・穂高の地形と地質・岩石」の氷河の存在云々・・・には、また新たな驚きと十分な納得をもって読まされることとなった。そして頁を繰りながら紀行・記録を読んでいくと、どれもその一つ一つに頷くばかりだった。

中でも「鵜殿正雄氏の初縦走」には固唾をのむ。《穂高岳の開拓者として、鵜殿正雄氏の残された業績ほどすばらしいものはない。しかし、またこれほど世に知られていないものも少ないように思われる。赤石山脈、木曾山脈、その他上信四阿山など同氏は多くのエネルギーな紀行や、山名の考証などを初期の山岳紙上に発表されているが、その最も力を注がれたのは何といても穂高岳の開拓であった。明治42年8月になされた前穂、奥穂、槍の初縦走・・・、岳川谷から天狗沢を登り、天狗のコルからの奥穂高および西穂高への初縦走は、飛驒山脈における探検的登山史上の



黄金時代を飾るにふさわしい堂々たる金字塔として永久に残されているのである》

こう言う精神はこの巻ばかりでなく、この全集10巻全てにおいて流れていよう。この言がまさにそれを代弁していると言えるから。また、さらに《・・・穂高に登り、剣にはぐくまれて、この国のたくさんの登山者たちは見事な成長をとげていった。・・・しかし、安曇平原の奥深く雲霧を吞吐して鋭く天にそそり立つ穂高一この飛驒山脈の最高峰が、どのようにして人類との関係を持つにいったか、その早期登山の歴史や、山名の由来などは、この華やかな存在に比してあまりにも世に知られていないように思う。・・・日本山岳会が生まれてから、すでに半世紀以上が流れているのである。少なくともこのへんで穂高なり、剣なりの、一応纏まった正確な登山史を知りたいと望むのは、私一人だけではないまい。こうした意味から、ここに穂高岳の早期登山について、目にした資料の中から拾い上げ、一つの覚え書きをつくってみた。/

「穂高岳の早期登山者の序」》とあり、認識を強くせねばならない。

この章「穂高岳の早期登山者」は11項からなっていて、どれも読みたい。「3、ウェストンの穂高山登山」「4、初期の登山者たち」「5、鶴殿正雄氏の初縦走」にはとくに目がはしる。分量2段組み24頁を感じず読破、何とも重厚だ。

改訂版の頁を繰っていると、終章近くの滝谷の記録「巖冬期C沢右俣奥壁登攀」（成城大学山岳部）他1点に目が止まった。えっ、と読み進むと、〈1959年12月30日～31日、ザイルシャフト：橋村一豊・尾崎祐一〉橋村一豊記とあるのには、ただただときめいたものだ。末尾に「成城大学山岳部は・・・バリエーションルートへの志向を失いつつある大学山岳部の情勢のなかで、少数精鋭主義的な行き方をとり、近年剣、北岳、穂高などの岩場で尖鋭的な登攀を実践した。ここに収録したものはC沢右俣奥壁の積雪期初登攀の記録で、『岳人』154号に掲載され、次のグレポンの記録とともに滝谷開拓の歴史の最後をかざるものである」と、注釈されている。

さらに執筆者（改訂版）から見ていくと、「五峰東面中央壁（赤壁）中央ルート登攀/石原国利」に止まった。12頁の分量から6項の「おわりに」の一部を引用したい。《思えば昭和32年秋の試登から36年春の登攀までに、赤壁の登攀に4年の歳月を費やすことになった。・・・しかし、ここに画期的のことがおこった。つまり埋込みボルトの登場であった。傾斜が傾斜でなくなった。・・・谷川岳衝立岩における見事な勝利はすでに登山界に新しい時代が訪れたことを知らしめた。・・・ボルトの技術は生まれるべくして・・・。旧き感覚に固執することが、いつの世にも時代の進歩を妨げる。私達は赤壁の登攀を契機として、私達自身が新しき時代に生きるべく脱皮したいと希うのである。》

合わせて各項目の末尾の注釈を読んで頂きたい。《石原国利氏は岩稜会会員、日本山岳会東海支部長。岩稜会は穂高の全域にわたって最も研究的な活動を行ったことで知られている。本稿は明神岳の岩場を代表する五峰中央壁の中心部における無積雪（昭和35年）および積雪期（昭和36年）の初登攀の記録であ

り、近年穂高岳をめぐる最も輝かしい記録の一つである。初稿は日本山岳会東海支部報『東海山岳』第1号に発表されたが、本巻の改訂を機に新たにこの記録を収載するに際して、筆者の手により修訂が加えられ、さらにルート概要などが追補された》とあり、解釈が深まる。

ちなみに、第5巻『北岳・甲斐駒・赤石』を手引きに白峰三山の荒川本谷に入ったことがあり、アスナロ沢出合下部にベースを置き、本谷からの北岳、アスナロ沢からの東西農鳥。5月初めで上部にたっぷり抱いた雪渓に快適なステップを刻んだことが懐かしい。若き日の山である。

これらは60数年前の記録が収録されてはいるが古めかしさは感じない。どれも初登攀がほとんどで概説、紀行と合わせて、その筆者の想いがドンと滲み出ていて、つい引き込まれながら読んでいる自分がある。このごろは「本なんぞ読まなくても山は十分楽しめる」と言われそうだが、それはそれで良しとして今、地形なり歴史なりを掴んでいてその山に登るのとでは後になり必ずや記録なり、想いに差が出てくる。

支部所蔵にはこの巻のみ。全巻の書名を列記するので参考にされたい。なお、（）は改訂版記載。1巻『日本の山と人』（代表的なエッセーを集めた本巻は、そのまま近代日本登山史の観を呈する・・・）、2巻『槍・穂高・上高地』、3巻『剣・立山連峰』（剣・立山・黒部）、4巻『鹿島槍・白馬・黒部』（白馬・不帰・鹿島槍）、5巻『北岳・甲斐駒・赤石』、6巻『八ヶ岳』、7巻『谷川岳』、8巻『富士・奥秩父』（富士・丹沢・三つ峠）、9巻『山の危険・山の遭難』、10巻『登山の基礎と技術』。

終わりに、全ての紀行・記録の末尾に執筆者の注釈が付されているのはありがたい。掲載年・掲載紙などの誤理解が無くなる。

A5判 325頁 発行：昭和36年3月1日

A5判 362頁 発行：昭和41年3月15日

（改訂）

発行所：（株）東京創元社



登山靴が 滑った

装備委員会委員長 千葉 泰丈

霊仙山に行った。前の日からその日の朝まで雨が降り続いていたのだが、当日は天気予報で晴れると予報が出ていて朝には予報通り雨は上がっていました。ところが問題なのは霊仙山は石灰岩の山で、濡れた土はヌルヌルで良く滑る。ここに足を置いたら、そして踏ん張ると滑るのではないかと予測しながら、でもここしかないからと足を置いて滑らないようにと願いながら。でも踏みつけるとやはり滑ってしまい、酷いときにはズボンを汚してしまう。まさに悪戦苦闘。転ぶと、当然のことながら体力も気持ちも落ち込んでしまう。登りがそうであったように下りではさらに大変だ。一緒に歩いていた同行者は一瞬両足が宙に浮くほどの転倒をしてしまったのである。へ、へ、へと照れ隠しをして笑うのだけど地面にぶつかってしまったお尻はかなり痛そうだ。

山に登るために作られている登山靴は山の道のどんなどころでも滑ることが無いように山を歩く時の最大公約数を想定してグリップの良いソールを開発がなされて靴が作られている。登山中のおおよその状況ではその機能が最大限発揮されて、快適に歩けるわけだが逆に完璧に滑らないわけではないという事である。滑りやすい状況を例にあげると濡れている岩、例えば沢を渡るとき飛び石、緑色の苔の岩、濡れた木道と濡れた木の根っこ、ざらざらの小石が散らばっている道、もちろん急な斜面でもある。

靴に問題

靴の方に問題が有って滑ってしまう場合もある。靴底がすり減っている靴、靴底に泥が詰まってしまっている場合など。そして靴の中で足がきちっと固定されていなくて、靴の中で足がずれてしまうときなども強く踏ん張れなくて滑ってしまう。

登山靴の底には必ず付いていると言っても良い八角形の黄色いビブラムのマーク。これは高品質な靴底のみを作っているビブラム社の作った製品であることを表したものです。昔から登山者にはおなじみのシンボルなわけだが、このビブラムソールも最近バラエティ



もかなり増えた共にその性能もアップしているという事である。最新の製品名ではメガグリップという名前と呼ばれていて、グリップ力やデザイン性、そして軽さなどは今のところこれを上回る性能のものが無いようである。世界の登山靴ばかりではなく靴底においては独占的なシェアを誇っている。

若くてももちろん体力がいっぱいある若い人が他の人より多く滑ってしまっているのが気の毒に思ってしまうのだが、滑らないように歩く技術にも改善の余地があるという事であろうか。もしかして靴のせいで滑ってしまっているのでは無いかと、どうしてもその靴を点検しなくなってしまうのである。靴底のブロックはすり減っていないか、泥などが詰まっていないか、靴の締めりが悪くなってないか。そしてついついどのくらい使った靴なのか余計なことを聞きたくなくなってしまうのである。もしかしたらその人に嫌われるのではないかと恐れながら、言ってしまう。新しい靴を買った方が良いですよ、と。



山書蒐集夜話(その3)

支部員 安藤 忠夫

森本次男著『樹林の山旅』あれこれ

奥美濃の山(岐阜・福井県境)の紀行・案内記で、辺鄙な一地方の山域を扱ったものながら、至近の距離にいた私たちは、本書を手に、ここに著された在りし日の山里の佇まいを求めて、どれほど足繁く山の旅をしたことか。本稿では、そんな想い入れのある本に関わる話をしてみたい。

2014年正月前後から数ヶ月にわたって、『樹林の山旅』が古書店の棚に並べられていた。名古屋の街中、上前津交差点の南西角・S古書店でのことである。古書店としては手広く商いをしている店で、すぐ近くにわが日本山岳会東海支部のルームがあって、そこに集まる岳人を目当てに、山書や釣り関連書を比較的多く並べている。私も月に一回程度は立ち寄ることになっている。近ごろはあまり購入することはないが、それでもこの店にとって、上得意客の一人ではないだろうか。いつだったか、ダンボール箱10コほどを持ち込んだこともあって、店の人とはまんざら、見ず知らずの仲ではない。

正月過ぎ、いつものようにそれとなく見回していると、森本次男の『樹林の山旅』があった。オリジナル本ではない。復刻本でもない。それらならば私の書庫にもあって、間違いようもない。棚に並べられていたものは、本文が所々不鮮明なコピー仕上げ、奥付はない。萌黄色の無地カンバス仕立てで、裸本である。まさしく「海賊本」であった。

ところが、裏表紙見返しに鉛筆書きで、「復刻版 1万2600円」と記されてある。

ウーン? そういえば、一度だけだったが、かつてこの海賊本を見たことがある。奈良で行われた蒐集仲間の集まりの折りに、京都の阿部恒夫さんが、「こんな本が出ているが、アンタは知っているか? とんでもない事だ」と云われていた。発行者の名前も聞いた。

それより大分前のことだが、ある会の月報192号(昭和54年1月)で、阿部恒夫さんが「『樹林の山旅』復刻余話」の後段で、「……



森本次男著『樹林の山旅』 左・元版、右・復刻版と函

著者がそれほどいやがっていた(?)『樹林の山旅』を、こともあろうに海賊版で出したのが、この〇〇氏(註1)なのだから、……」と記されているところの本である。

当時すでに、『樹林の山旅』のオリジナル本は、市場ではめったに見かけられなくなっていた。昭和15年12月に朋文堂から、わずか1500部が発行(註2)されただけに、私たち後進者が気付いた頃には、めったに市場に出るようなことはなかった。

そんな事もあって、本書の復刻版は、京都の小谷隆一さん、阿部恒夫さんらのお骨折りによって、昭和53年8月にサンブライght出版から刊行。普及本5800円、その数年後に特装本1万5000円で売り出された。にもかかわらず、これも再び、今ではめったに書店で見かけることはない。

そんな、入手困難だった頃の、この本に纏わる話を一つ。

昭和60年頃だったか、さる会の東海地区の会員が、本書『樹林の山旅』所収「忘れられた山々」の項で登場する、岐阜県揖斐郡坂内村(当時)の「港や」旅館に投宿した。すると、自家の名前が出てくる本書が床の間に飾ってあった。翌日、「夕方には返すから」と、無理強いして本書を借りだした。ところが、泉鏡花の『夜叉ヶ池』で取り上げられているその池の畔で、昼寝をしているうちに、夜叉姫に拐かされたのか、件の本を忘れて下山してき

てしまった、という事件を引き起こした。該当の会員は「買って返却することになっているが、どこかに売っていないだろうか。探してほしい」と訴えられていたものだった。

話を戻す。2014年2月に件のS古書店に寄った。やっぱり『樹林の山旅』の“海賊本”があった。

“海賊本”が“復刻本”と記されていることが気にかかる。で、3月中旬、とうとう意を決して申し上げることにした。本屋さんと言えども、専門分野以外は必ずしも詳しくないはず、間違いもあるだろう。やがて誰かが…、ひょっとすると自分の知り合いが、“海賊本”であることを知らずに購入してしまうことだってあり得る。それでは、手に入れた者も売った方も、互いに後味が悪いだろうと、少しばかりの老婆心に駆られたことによる。

「本屋さんこんなことを言うのは失礼だと思うのですが、あれは“復刻本”ではなくて“海賊本”なんです。3～40年程前に、京都や大阪で、問題になった本です。……」

「どれですか。そんな？ ……」

棚から引き出してきて、裏表紙の書き込みを見、顔色が変わった。

「もう少し詳しく言うと、……」

「今は仕事中ですから」

と、あとは耳を傾けてもらえなかった。箒で掃き出されそうな雰囲気。

そんなに悪い事を言ったわけではないと、納得できないままにS古書店を後にした。自分の間、顔を見せようものなら追い出されてしまいそうで、モノ申したことを悔やんだものだった。

その後、立ち寄った知人の問い合わせによると、「店頭には並べていないが、完全な復刻版で、当然売り物です」との応えだったらしい。

答めだてて言ったわけではない。私は、本屋さんの“モラル”、なんぞと四角四面の価値観なんぞを持ち合わせているつもりはない。古書としての価値は、稀少性に預かるところも大なのだ。で、この“海賊本”が、その稀少性に重きをおいて、「海賊版 1万2600円」と記されているのであれば、受け入れられるのだが。

誰だって思い違いや間違いをすることはよくある話。心穏やかに申し上げたつもりだっ

たが、以来、自分の心の内で、この事が消化しきれずにいる。本屋さんにとって、正しい知識を得るまたとない機会だったはずなのに、と思うのだが。

(註1) ○○は本文では姓が記されている。

(註2) 山徒倶楽部会報『山徒』166号所載、森本次男筆「続樹林の山旅」参照。

深田久弥著『津軽の野づら』のことども

いまさら、山書からはあまりにも縁遠い『津軽の野づら』なんぞを取り上げるとは？ とひんしゆくをかいそう。であるが、深田久弥の故郷・加賀市近くの北陸の地に在住する知人が、近ごろ『山たび余情』と題する山書をものし、その中で「一つの生 深田久弥の虚と実の間にあるもの」と題して、久弥論を展開した。たまたまその本の編集の任にあたっていたので、それに触発され、私なりの昭和初期、鎌倉文士時代の深田久弥を見ておくことにした。

何しろ久弥の人気は『日本百名山』刊行以来、今日に至っても衰えるどころか、益々多くのファンを獲得しているように思える。百名山の名声にあやかって、『深田久弥選集 百名山紀行』(2015年11月、ヤマケイ文庫)の上下が出たり、滝本幸夫『私の中の深田久弥』(2015年10月、星雲社)、当事者・奥さんの深田志げ子『私の小谷温泉—深田久弥とともに』(2015年11月、山と溪谷社)と、さらに、Martin Hood 訳『ONE HUNDRED MOUNTAINS OF JAPAN』(2015年、University of Hawai'i Press)なる英訳本も出版されたりと、手をかえ品をかえて刊行されているのだから。

作品社刊の『津軽の野づら』は、「津軽の野づら」の章に、「津軽の寒」「エエデル・ワイス」「志乃の手紙」「母」の項があり、加えて「あすなろう」の二章から成っている。言わずと知れた北島八穂(実名・北島美代)と久弥との二人三脚によって生まれたもの。

本書では、八穂は、志乃として登場する。私は、アイヌメノコの孤児・チャシヌマが誕生するところを描いた「オロッコの娘」、そして冒頭の「津軽の寒」あたりに、初々しくも哀愁あふれる抒情と、染み入るような余韻を覚えて、最も感動できる。

本書の成り立ちについては御存知だろうが、話を進めるにあたって少しばかり整理しておく、昭和4年11月『新思潮5号』に「津軽

の野づら」と題して発表されたのが最初で、その後『作品 創刊号』、『文芸春秋 8 卷 11 号』、『婦人サロン 4 卷 6 号』、『改造 14 卷 11 号』などに、加えて江川書房版『翌檜』として発表したものを編集しなおして、『津軽の野づら』の書名のもとに一本に纏めたものである。この間、幾度も表題や構成をかえている。

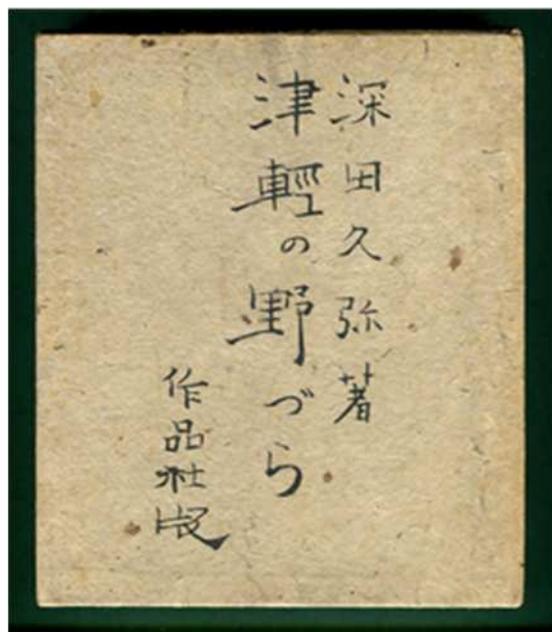
津軽の人・若き北畠八穂と久弥との繋がりを記すのも今更の感がある。が、改造社の懸賞創作募集に北畠八穂が「津軽林檎」と題して応募したことにはじまる。後に久弥によって、前記の昭和 7 年『改造 14 卷 11 号』に掲載された「あすなろう」に変身した。「津軽林檎」は選に漏れたが、当時学生的身でありながら改造社の編集部には彼が関心をもち、津軽へ八穂を訊ねる旅に出た。八穂は脊髄カリエスを発症し、代用教員を退職していた。その訪問が縁となり、久弥を頼って上京し、我孫子の地で同棲をはじめ（昭和 4 年）。この辺りの状況は、前記「志乃の手紙」でみてとれる。後、当時多くの文士が集まっていた鎌倉に転居した。

同棲生活をはじめたものの、山登りにうつつを抜かしているばかりで、いっこうに筆が進まない久弥をみかねて、留守をしている間や夜中に、八穂が、一連の物語の下書きをし、骨格を記しておく。津軽で療養していた頃に経験し、想い描いた夢物語だった。それを久弥が手直しをして出版社に持ちこむ。

このあたりのくだりは、安宅夏夫『「日本百名山」の背景』、田澤拓也『百名山の人 深田久弥』に詳しい。貧窮生活ゆえに、日々の暮らしの資を得るため、はじめは納得づくだった。だが、二人三脚による文筆活動も、夫婦であるうちは許されもしたが、後の妻・木庭志げ子の出現で破綻し、もろくも崩れてしまうのは当然の成り行きだろう。

久弥の作品として発表した当時は、好感をもって受け入れられ、これを契機に、文壇で、一定の地位を得ることとなった。

それは、一連の作品そのものに価値あることは当然ながら、世間一般で評価をうけたのは、著者が男性であることの驚きがあったのではないだろうか。一読して、いや何度目を通して女性でしか表現できない文章のあやがある。女性特有のこまやかさがあり、ウエットが漂っていて、余韻に満ちた作品群だと



深田久弥著『津軽の野づら』 作品社版

言いたい。それを記した人が、男性だったことが、最大の要因ではないだろうか。と、私は思う。

ほんの少し状況をずらせてみる。教員が、生徒の作文を添削して自分の名前で発表することが許されるだろうか。生徒は泣き寝入りするかも知れない。が、多くは反発するだろう。その一方で、私の強い子供ならば、添削されたことで、これは自分の文章ではない、と言いつけるかもしれない。その時、それを添削した先生の作品だといえるのだろうか。

同じこと、夫婦だから、合意があったからといって、妻の書いた作品を夫の名で発表することは、文学に対する冒瀆というもの。当時の時代背景があったから、などと理解づらしてはならない。

だとすれば、久弥はどう繕えばよかったか。事ここに至っては、懺悔記を記すこと。事の仔細を赤裸々に記した作品をものすることによって、いくらかなりとも名誉を取り戻すことができたのではなかったか。その点について云うならば、近年になって久弥論を展開した、安宅夏夫にせよ、田澤拓也にせよ、『日本百名山と深田久弥』の高辻謙輔、『深田久弥 その山と文学』の近藤信行にせよ、いずれも久弥研究者以前に、深田ファンであっただけに、刃先が鈍くなっていて、物足りなく思う。

それとも大人の扱いをしたと見るべきか。

久弥は本書『津軽の野づら』のあとがきに、一「志乃の手紙」は、目ざとい読者は察せられることと思ふが、ある婦人からの手紙をもとに書いたもの。……僕も年老いてルソオのやうに懺悔録を書く気持になつたら、もつとみつともないがもつと酷しいありていを書くであらう。一と記している。これを評して、当時、身近にいた小林秀雄が新聞紙上で一「年老いて」とはどういふ意味だ。酷しいありていを書いて青春の書を作る事の出来ない君の歎きはいつ語ってくれるのか。一と記しているが、これこそ友情に満ちた助言ではないだろうか。

なお久弥が、茅ガ岳で亡くなったのが 1971 年 3 月、68 歳のときだから、今思えばいくら

か早すぎた。もう少し生きながらえていたならば、自身の手によって、あるいはここに指摘した行動を取ってくれていたかも知れない。

ところで深田久弥を語るならば、やっぱり山の事にも触れておいた方がいいだろう。以前にもどこかで記したことがあるが、私は特別なファンではない。彼の功績をあげるとすれば、『日本百名山』によって多くの登山者を 100 の山に釘付けしておいてくれていること、山の紀行文を文学の域まで高めたこと、に尽きる。それ故に、山岳紀行作家としては、やっぱり、巨人であろうこと、論を待たない。

註 昭和 8 年刊、江川書房版『翌檜』は、「オロツコの娘」「亂暴者」「あすならう」の三編からなる。

委員会報告

【東海ユース】

～立山個人山行記～

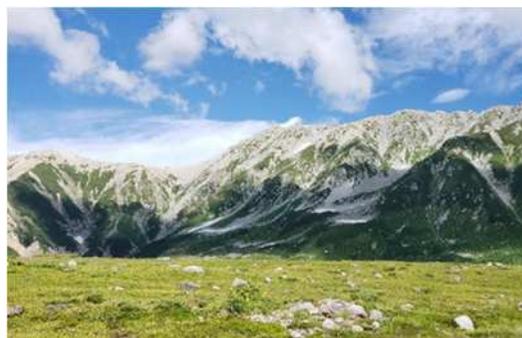
木村 綾子

東海ユースでは安全登山の普及、自立した登山者を目指し、メンバー全員が持回りで山行計画を立て月 1 回の定例山行を行うのが基本活動ですが、7 月・8 月の 2 ヶ月間は、夏山ハイシーズンということで、定例山行はおこなわず、メンバー各々が個人山行を計画し登山を楽しんでいます。

今年は、東海ユースメンバー 4 名で 8 月 11 日から 2 泊 3 日テント泊の計画で立山縦走を行いました。

バスと電車を乗り継ぎ立山ケーブルカー乗り場へ到着したのは昼過ぎ。お盆休み開始時期でもあり、混雑を覚悟していましたがケーブルカーも高原バスも計画通りの便に乗車でき、15:00 ごろ室堂へ到着。ここから雷鳥沢キャンプ場へと向かいますが、周りを見渡せば 3000m 級の山々が 360 度のパノラマ仕様で見られ、日常からかけ離れた場所へ来ている実感がわきます。雷鳥沢キャンプ場へ到着後はすでに遅い時間ということもあり、暗くなる前にテントの設営・食事を済ませ 1 日目は終了。

2 日目は雄山―大汝山―真砂岳―別山を回りますが、雨が降り出したため、一の越山荘でレインを着込み歩きました。雨はそれほどひどくありませんでしたが、昨日とは打って変わって 360 度ガスだらけ、眺望を楽しむこ



立山三山と真砂岳

とはできません。それでも雄山までは観光客らしき人もおり賑わっていましたが、そこを過ぎればひたすらガスと強風の中を歩くのみです。内蔵助カールの雪渓を見つづ黙々と歩き、別山南峰を過ぎたあたりからようやく天候が回復してきたので、ここぞとばかりに剣岳の写真を撮ります。天候が回復してからは写真を撮りながらのスローペースでしたが、15:00 ごろ雷鳥沢キャンプ場へ戻ってきました。

3 日目は帰るのみです。朝一の高原バスに乗れるようテントを撤収して室堂までの階段を上ります。天候もすっかり回復し、帰るのが名残惜しいくらいの景色を眺めつつ室堂を後にしました。気心知れたユースメンバー達ならではの楽しく思い出に残る山行となりました。

山行委員会だより

●初めての山行リーダーを経験して



10月30日に初めて山行リーダーを務めました。行き先は鳳来寺東面、以前にも一度行ったことのある場所でした。初めてという事で肩肘張りまくり念には念をと必要以上に事前の確認を行い、行く前から一人で勝手に疲れ果てそうな勢いでした。ふたを開けてみると以前にもほとんどの方と山行を共にした事もあり明るい雰囲気での一日が始まりました。

SLにはフィックスロープを張るシミュレーションからお付き合いいただき、終始助けられました。そのおかげもありサイコロ岩でフィックスを張り通過することに時間がかかってでもそこはしっかりと行うという目的がこなせました。最初から急登が続く読図も必須で盛り沢山な内容でしたが、一人ひとりが山行と真剣に向き合う事で無事に終える事ができました。自分の中の反省は多々ありましたが、大きな充実感も得られました。次回からはもう少し力を抜いて準備を行いたいです。

コロナ禍、中止になる事も多々ありましたが、2年にわたりリーダーになるための研修を行っていただきました。温かく見守っていただいた方々や忙しい中時間を割いて指導して下さった方に感謝しております。山行を行う事でお返しできればと思います。研修内容がこれからの山行に生かされ、どんなメンバーがきても行先がどこであってもしっかりと判断をし続け見極め、対応できるようにしていきたいです。参加されるみなさまも自立した登山者であると確信しております。ただ参加されるだけではなく、パーティーの一員として役割を果たされる人であることを願います。まだまだ未熟な人間ですが、みなさまと山行を共にする機会がございましたらその際にはよろしく願いいたします。
(山行リーダー 小林智佐)

●支部山行「沢登り」に携わって

沢登りを通じて支部の方々と山行を共にするようになり3年が過ぎました。最初の2020年は4本/年間ぐらいと思って計画書をつくりましたがコロナ禍にあり2本の実施でした。中止しても思いは高まり2021年は毎月1本と計画しましたがやはりコロナで中止を余儀なくされました。酷い時は「事前ミーティングはやるけど沢行きは中止ね！」なんて事もありました。20時で閉店となった飲食店の小雨降る駐車場でロープワークする皆さんには頭がさがりました。そして迎えた今年2022年ははじめて5本の実施にこぎ着けました。

これまでの3年間で振り返り無事に楽しく過ごせたことに感謝しております。

【沢登りで覚えてほしいロープワーク6種】に触れておきます。

- ①二種類の8の字結び(末端で作る・中間で作る)
- ②ボウライン結び(ハーネスが無い時)
- ③マスト結び(確保に有効)
- ④半マスト結び(セルフビレイに有効)
- *③④は濡れていても解きやすい
- ⑤ブルージック結び(ツェルトを張る時、ブッシュに支点を取る時、救急活動時)
- ⑥変形ダブルフィッシャーマン結び(懸垂下降時のロープの連結*解きやすい)

以上6種類の結び方を毎回おさらいしています。この6種類を何時でも使えるように自分の物にしておけば充分でしょう。

【同行した沢6溪】Ⅰ→Ⅴで難しくなりませんがいずれも入門コースでしょう。

- Ⅰ) 鈴鹿・赤坂谷(沢歩きの基礎)
- Ⅱ) 鈴鹿・元越谷(ロープ練習)
- Ⅲ) 鈴鹿・愛知川下降(泳ぎの体験)
- Ⅳ) 鈴鹿・愛知川周遊(変化があり楽しい)
- Ⅴ) 木曾・岩倉川(木曾の美しい沢)
- Ⅵ) 飛騨・木地屋溪谷(紅葉を楽しむ)

*上記6溪で経験を積んで未知の谷に入溪できるようになればと考えています。

沢中泊の山行はツェルト泊・焚火と何倍も山を感じ楽しさを知る事でしょう。

来年度も皆さんと沢を楽しみたいと色々と考えております。是非ご一緒ください。

(山行リーダー 渡邊泰夫)

会 務 報 告

【2022年9月常務委員会】

日時：9月28日(水)

- 1. 支部長挨拶(高橋)：**コロナも落ち着いてきて支部員の山行が始まってきた。支部長になって3つの目標を以前に立てた。①に安全第一、②にナンバーワンを目指す。個人のスキルアップを図る事、③に一体感を持つ、の3点。③番目については少し足りないと感じている。横の連携を今後は強めていきたい。また、アルパインクライミングの出来る組織づくりもして行きたいと思う、旨の報告があった。
- 2. 総務委員会(今津)：**9月の入会1名、退会3名。新年会は1月15日に今池ガスピルを予定。12月28日の常務委員会は懇親会を兼ねる予定。12月17・18日は揖斐川の支部長別宅で懇親会兼、播隆上人のレリーフ周辺の除草の計画を立てたい。4月8・9日には支部山行で集中登山の計画を立てたい。目的は支部内の各委員会の懇親を深める事で、10月に企画を具体的にしたい。12月24日には猿投の森づくり委員会による集中登山の計画もあるので懇親を深める事が出来る。インドヒマラヤの報告会は新年会に行く。ヤマトシプロジェクト寄付金を創設して支援金活動を本人と相談してスタートさせたい。
- 3. 愛知県岳連(鈴木欠席)：**資料配布で行事日程変更のお知らせ
- 4. 支部友委員会(金谷)：**8月計画は白山の計画以外は順調に進んでいる。10月8・9日は朝明ミーティングを実施する。この時期、費用が高騰していて10万円の補填をお願いしたい。→常務委員会で承認された。但し、今後は当初計画時に予算化していただきたいとの事。12月13日に支部友ミーティングを行う。支部長の出席を依頼し了承を得た。
- 5. 山行委員会(稲葉)：**支部山行について7・8月の山行は天候不順もあって半分程の実施となった。秋については計画通り実施していく。忘年山行は11月26日3年ぶりに実施する。新規リーダーの育成は適宜している。その他、テント購入、遭難対策規定の見直しは記載通り。支部長より、ゴザフェスへの参加依頼があった。またクライミングのできる人の情報を求めた。→調整の上、参加する旨報告がされた。
- 6. 亀の会(欠席)：**資料配布

- 7. 猿投の森づくりの会(和田)：**通常作業は予定通り実施。今後の予定は記載通り行う予定。12月10日には“わいがや講座”で民有山林整備と自然エネルギー活用(SDG'sの実践)の見学と除伐、薪作りのボランティアを行う。また、12月14日にはナゴヤ環境大学の開講に合わせて餅つきと森造りの道具の整備を行う。
- 8. 東海ユース(服田)：**会員動向は変更なし。定例山行は百々ヶ峰の実施、朝熊山の実施。11月3日故大島指導員の追悼式を現地で開催。→家族にも連絡をした方が良いと意見有。11月6日秋のブラインド登山は4名参加。
- 9. 青年部(トーレス)：**11月16日ゴザフェスは参加。同19日合宿を予定している。10月29日は上高地の計画している。それぞれが山行計画をして合宿地に集まる計画とした。
- 10. 東海学生連盟(丸岡)：**現在ゴザフェス参加者を募集している。東海支部員にも参加を求めた。11月6日はボランティア登山に参加する。山行委員会の稲葉氏から10月15日のリーダー訓練はゴザフェスに振り替えることができるので参加との事。
- 11. 登山学校運営委員会(服田)：**8月9月の山行は記載通り。10月は朝明ミーティングに参加。机上講習は記載の通り実施する。
- 12. 自然保護委員会(井藤)：**花王ヘルシアよりの50000円の助成金に付いて、カメラの購入を本部の了解のもと決めた。10月7日は、上山路川遡行を行う。
- 13. 海外登山(高橋)：**山田氏が9月27日マナスルでアタックを開始した。現地は雪崩が発生しており一旦クローズしていたが現在は開通したとの事。その他には来年の計画として韓国登山を考えている旨報告された。
- 14. ボランティア委員会(前田)：**タンポポ登山は中止。10月1・2日の合宿登山は予定通り実施。
- 15. 支部刊行物(星)：**東海山岳は現在最後の纏めに入っている。次月には委員会を開き指導委員に集まってもらい纏めの状況を確認して進める予定。
- 16. 遭難対策委員会(高松)：**8月登山届は71件あった。内、個人山行は57件でグレード3は0件だった。遭難対策委員会は開かなかつた。9月27日に委員会を開いた。11月23日に救急

講座を開く。事前にセーフレスキューの座学と実地を行う。10月4日に装備講座を行う。

17. 写真展実行委員会（伏屋）：来年2月21日から市民ギャラリー栄で開催する。募集期間は10月1日から11月30日迄。今回はフレームの大きさをA2判とA3判の2種類とし、重量の軽いものを利用する。出展費用も軽減させて参加しやすくした。前は80点参加点数があった。写真展に向けて山の写真教室を11月3日に開催する。10月の委員会は中止とした。

18. 技術向上委員会（清水）：10月15日に道迷い防止講習会をルームで行う。最近の傾向として愛知県内の遭難は56件、その内道迷いは28件。県全体の半数が低山の樹林の中での道迷いを起こしている。講習は、道迷いの現状と予防法、道迷いの防止ツールなどの内容で行う。

19. 古道調査委員会（西山）：4月に塩の道、5月に尾鷲道・八風街道を調査した。秋から来年中に大台ヶ原から尾鷲道の調査を予定している。

出席：高橋、今津、前田、高松、清水、服田、西山、丸岡

リモート参加：金谷、星、伏屋、和田、井藤、トレス、稲葉、千葉、

【2022年10月常務委員会】

日時：10月26日(水)

1. 支部長挨拶（高橋）：コロナも落ち着きいてイベントも活発になってきた。東海支部もゴザフェス等滞りなく終わり、各地区の周年記念も始まっている中、東海支部も新年会の準備に取り掛かっている。東海支部には2人の若い支部員が育っている。山田利行さんはマナスルは失敗したが、広島支部と同行したアマダブラムは4時間30分で登頂を果たした。草野さんは北アルプス40日間完全無補給で縦走した。今後、東海支部は他地区の支部との交流を積極的に進めて行く活動をしたいと考えている旨報告がなされた。

2. 総務委員会（今津）：10月の入退会は入会1名。今後の行事として1月15日の新年会。場所はスノーピークのレストラン、会費は6000円を予定している。又、総務委員会の総務費が不足している為15万円の追加予算を補填する事になった。12月28日常務委員会は栄リビエールで行う。12月17・18日は東海支部で寄贈したレリーフの現状確認を行う。山路小屋の餅つき大会は12月24日に行う。山利プロジェクトの助成金については記載の通り。山田利行さ

んは来月上旬に帰国する旨、報告された。

3. 愛知県岳連（鈴木）：11月25日の岩瀬氏による“遭難防止を考える講演会”の紹介がされた。また、2026年9月から10月迄の16日間、アジア競技大会が名古屋で行われる事になり組織委員会が立ち上がった。岳連ではスポーツクライミングを担う。また、県岳連は2023年度より法人化する事になり準備を進めている。

4. 支部友委員会（金谷）：9月10月の山行行事は順調に進んでいる。朝明ミーティングについて、今後の課題・食料費用について来月の反省会で纏める予定にしている。支部友委員会の追加経費については11月7日の委員会で纏めて報告する。来年度から予め予算化して欲しい旨報告された。

5. 山行委員会（稲葉）：ゴザフェスの参加申込者はなかった。リーダー育成は御在所の本谷で、5名参加で実施。

6. 亀の会（加藤）：提出資料の通り。10月28日に運営会議を行う。その中で来年度の正副代表の選出を予定しているが現在の所、候補未定で調整中となっている旨報告された。

7. 猿投の森づくりの会（和田）：森づくりは計画通り進んでいる。10月からは東大演習林の間伐が始まる。11月12日から、森の探検隊を再開する。11月26日は法人DAY。12月10日はSDG'sを実践している社会福祉法人の見学と除伐・薪作り支援のボランティアに参加を行う旨報告された。

8. 東海ユース（鈴木）：会員動向は、1名退会で、男性1名・女性10名で11名となった。定例山行として、10月15日朝熊山8名参加。11月26日の入道ヶ岳で体験山行者1名（35才の男性）を予定している。12月24日には猿投森づくりの会の餅つきに参加する予定。その他、故大島委員の追悼式を荒島岳で行う。11月6日秋のブラインド登山に4名参加する等の報告がされた。

9. 支部報・東海山岳広告掲載について（高橋）：広告募集を検討している。承認のお願いをしたいとの事で、常務委員会で承認された。

10. 青年部（荒木）：今月末、青年部13名で2～3班に分かれ、明神岳・岳沢へ合同山行を行う。

11. 東海学生連盟（丸岡）：10月15・16日学生14名と青年部・山行委員会の参加でゴザフェスを実施した。11月からチーム冬山の勉強会を始める。12月から冬山を開始する予定で

いる。11月6日ボランティア登山に3名程参加予定。その他、会計報告を行い、秋の総会は12月に行う旨報告された。

12. 登山学校委員会 (服田) : 欠席、資料提出有り。

13. 自然保護委員会 (井藤) : 欠席、資料提出有り。

14. ボランティア員会 (前田) : 10月1・2日ボランティア委員会合宿は伊吹山北尾根・大禿山往復登山で実施。タンポポ登山は中止。秋のひまわり登山は10月29・30日に沼津アルプスへブライント登山者3名参加で実施予定。秋のブライント登山は11月6日夏焼城ヶ山にブライント登山者8名、同行者25名実施予定。次回のひまわり登山は11月23日を予定している旨報告された。

15. 遭難対策委員会 (高松) : 登山届9月は56件、内リスクチェック表添付は38件だった。装備口座は12月4日に行う。救急講習は10月22日に支部ルームでファーストレスキューの事前講習を支部で行った。11月20日にレスキューの実地訓練を行う。また、遭難対策規定の見直しについて話をした。登山届・登山計画書提出の手引きを作り始めている点について質疑が行われ、継続審議となった。

16. 写真展実行委員会 (伏屋) : 欠席、資料提出有り。出展写真の募集中11月30日締め切り。

17. 技術向上委員会 (清水) : 10月15日道迷い講習会を、遭難の背景・遭難の発生・予防・対応について実施した。次回11月6日に、左門岳で“道迷い遭難防止実地講習会”を行う。現在参加者は3名。10月28日募集締め切り。出席：高橋、今津、高松、清水、服田、丸岡リモート参加：金谷、佐野、和田、前田、清水、加藤、稲葉、片岡、荒木、鈴木

ル ー ム 日 誌

— · —	9月	— · — · — · — · — · — · — · — · —
	大会議室	/小会議
1 (木)	写真展実行委員会	
2 (金)		/古道塩の道
4 (日)	東海ユース	
5 (月)	支部友委員会	
6 (火)	県岳連	/TNCC
7 (水)		/青年部
8 (木)	自然保護委員会	
10 (土)	登山学校机上講習会	
12 (月)	登山学校運営委員会	

14 (水)	山行委員会
19 (月)	図書委員会・読図会
20 (火)	ボランティア委員会
21 (水)	東学連 /技術向上委員会
22 (木)	正副支部長会議 /総務委員
26 (月)	支部友読図会
27 (火)	遭難対策委員会
28 (水)	常務委員会

— · — 10月 — · — · — · — · — · — · — · — · —

1 (土)	登山学校机上講習会
3 (月)	学校指導員研修会
4 (火)	県岳連 /TNCC
5 (水)	青年部
7 (金)	/古道塩の道
8 (土)	“朝明ミーティング”
9 (日)	“朝明ミーティング”
11 (火)	登山学校運営委員会
12 (水)	山行委員会
13 (木)	自然保護委員会
17 (月)	図書委員会・読図会
18 (火)	ボランティア委員会
19 (水)	東学連 /技術向上委員会
20 (木)	正副支部長会議 /総務委員会
21 (金)	亀の会
24 (月)	/支部友読図会
25 (火)	遭難対策委員会
26 (水)	常務委員会

— · — 11月 — · — · — · — · — · — · — · — · —

1 (火)	県岳連 /TNCC
2 (水)	青年部
3 (木)	写真展実行委員会
4 (金)	古道塩の道
7 (月)	支部友委員会
9 (水)	山行委員会
10 (木)	自然保護委員会
14 (月)	登山学校運営委員会
15 (火)	ボランティア委員会
16 (水)	東学連 /技術向上委員会
17 (木)	正副支部長会議 /総務委員
21 (月)	図書委員会・読図会/ 支部刊行物編纂委員会
23 (水)	常務委員会
28 (月)	支部友読図会
29 (火)	遭難対策委員会

会員異動

入会：青木貴祥(16991) 深谷昭広(16985)

物故：山中光子(13022)

INFORMATION

【総務委員会からのお知らせ】

支部新年会は以下のように開催します。
日時：2023年1月15日（日）午後3時受付開始
場所：SNOWPEAK EAT 栄
中区錦3-5-15
RAYARD Hisaya-odori Park
テレビ塔北側 TEL052-211-9191
地下鉄 久屋大通り駅 北側出口
第1部 報告会 3時30分～
・草野駿希君 北アルプス一筆報告
・山田利行君 ヒマラヤ報告
・第14次インドヒマラヤ隊登頂報告
第2部 懇親会 5時～
詳細は東海支部HPをご覧ください。

総務委員会 今津英一朗

【写真展実行委員会からのお知らせ】

1 写真展の開催

2023年2月21～26日、名古屋市民ギャラリー一栄にて、第18回東海山岳人写真展を開催します。

開催案内のポストカードを支部報に同封しました。今回は関係者の方に郵送しません。

注) カードは、余分がありますので、追加希望の方は支部ガイドのカレンダーを見て、ルームが開いているときにとりに来ていただくようお願いいたします。

注) カードは、余分がありますので、追加希望の方は支部ガイドのカレンダーを見て、ルームが開いているときにとりに来ていただくようお願いいたします。

2 山の写真教室(初級・中級)

第3回目は11月3日(木)実施しました。講師；竹島宏侑氏(キャノンフォトクラブ名古屋代表)。参加者13人。添削者14人、89点。写真展出展作品の相談(選定、トリミング、画像の修正、など)を行い、後日、講師の添削結果を返して、作品提出に反映しました。

・参加ご希望の方は、伏屋までメールでお知らせください。

メールアドレス：fmit1211@mediacat.ne.jp

写真展実行委員長 伏屋 満

【支部刊行物編集委員会からのお知らせ】

60周年記念事業として「東海山岳12号」を発行いたします。

2月中に発行の予定で、1冊3,000円(予定)です。購入を希望される方は、支部刊行物編集委員会の委員に申し込みをお願いします。メール等でのお問い合わせは

khoshi@katch.ne.jp 星 一男までご連絡ください。



東海山岳 No10, No11

【支部報編集委員会からのお知らせ】

お詫びと訂正

支部報171号の10ページでお知らせしました「メルマガに登録してください」は本誌20ページの「東海支部メルマガ登録のお願い」が正しい案内でした。お詫びと共に訂正いたします。

支部報編集委員会 星 一男

編集後記

明けましておめでとうございます。1月号はご覧の通り40ページとなりました。寄稿をいただきながら、編集都合により次号に掲載となる事態が生じています。編集担当として感謝の念でいっぱいです。

60周年記念事業の締め括りは、「東海山岳12号」と「支部報合本版」の発行です。2月中の発行に向けて最後の作業を続けています。前号の東海山岳11号の発行は2011年でした。その後、今までの支部の活況有る姿の源泉は何か。一読いただければ理解いただけると自画自賛しています。支部報編集委員会 星 一男

SINCE 1975
mont·bell
FUNCTION IS BEAUTY

最新情報はこちらから
www.montbell.jp



0088-22-0031 06-6536-5740

株式会社 **モンベル** 【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス

法務相談は行政書士にお任せください!

相続

会計

許認可

1時間無料相談

あなたの不安を解決に導きます

遺言書、遺産分割協議書、
法定相続情報一覧図作成、任意成年後見の相談など



西山行政書士事務所 ☎052-961-6506

名古屋市中区丸の内3-21-21丸の内東桜ビル1004
www.nygs-office.com

久屋大通駅
徒歩1分

『東海支部報』では、
広告を募集しております

表4(裏表紙)掲載

※掲載のご希望・お問合せは

jactokai107@gmail.com まで

***** OMC *****

住いのコンサルタント

(有) 富士見企画

〒460-0014
名古屋市中区富士見町8番8号

オフィスに関する悩み事、丸天産業が全て解決します。

ファシリティマネジメントによるオフィス構築や
デザイン、インテリアやセキュリティなど
オフィスのすべてが揃っています。

オフィスのお困りごとを丸がかえでお応えいたします。



郵送無料 Honesty

コンサルティング事例集

オフィスに関するお悩み事の解決事例が載っています。
お申込みは下記までお電話ください。

株式会社 丸天産業

本社 〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄5丁目10-34
TEL: 052-241-3686 FAX: 052-241-0457

企画・デザイン・印刷



株式会社 浅井隆文社

〒461-0044 名古屋市東区矢田東1番22号
TEL (052)719-0677 FAX (052)719-0678
E-mail: info@asai-rbs.co.jp